
黒魔術師松本沙耶香 薔薇篇

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

黒魔術師松本沙耶香 薔薇篇

【Nコード】

N9038A

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

鎌倉の古い洋館に招かれた松本沙耶香。そこで五人の犠牲者を求める手紙を受け取った。彼女を慕う占術師速水丈太郎と共に事件の解決に向かう彼女の前に現われるのは薔薇か美女かそれとも。松本沙耶香シリーズです。速水丈太郎も登場です。

第一章

黒魔術師松本沙耶香 薔薇篇

鎌倉。長い歴史を持つこの街に今一人の女がやって来た。

黒く長い、絹の様な髪を上で束ねた白面の女だ。二重の目は細く切れ長でそこにブラックルビーを思わせる漆黒の輝きを放つ目がある。

唇は紅く、まるで血で染めたようである。それが白い顔と不気味なまでの対比を見せていた。

女にしては高い背を黒のスーツで覆っている。その下に着ているのは白いカッターと赤いネクタイであった。そのスーツから見える首も手も雪の様に白い。

この女の名を松本沙耶香という。彼女は今鎌倉に降り立ったのだ。

この漆黒の墮天使に一人の男が歩み寄ってきた。男はサングラスをかけ、黒い服を着ていた。

「松本沙耶香さんですね」

男は沙耶香に問うてきた。

「そう名乗れば貴方はどうされますか？」

沙耶香は男にその白い顔を向けて言った。低く硬質の、それでいて整い、中に淫靡なものさえ宿した声であった。

「御招待に参りました」

「では貴方が」

「はい」

男は恭しく一礼した。それからまた述べた。

「旦那様がお待ちです」

「わかったわ」

沙耶香はそれに頷く。

「見れば約束通りの時間ね」

彼女はここで懐から懐中時計を取り出した。それで時間を見る。時計に着けた銀の鎖が日の光を受けて眩しく輝く。

「律儀なことね」

「それが私の主義でして」

男はまた恭しく述べた。

「それでは御約束通り」

「ええ」

沙耶香も彼に応えた。

「御案内致します」

「案内してもらう前にいいかしら」

「何でしょうか」

男は沙耶香のその言葉に動きを止めた。

「聞きたいことがあるのだけれど」

「それは」

「この案内はあの方の意志なのね」

「はい」

男は短い言葉で答えた。

「左様です」

「そう、それならいいわ」

沙耶香はそれを聞いて満足したように頷いた。

「それじゃあ」

「はい」

沙耶香は男に案内され車中の人になった。暫くして鎌倉の郊外に出た。車はまだ進む。

「鎌倉も変わったわね」

沙耶香は窓の外から見える風景を眺めながら言った。

「暫く来なかったただけなのに」

「左様ですか」

「ええ、そう思っわ」

その切れ長の漆黒の目は鎌倉の落ち着いた風景を眺めている。そ

ここに見えているのは果たして現実の世界であるのかそれとも別の世界であるのかはわからない。だが彼女はそこに鎌倉を確かに見ている。

「魔性の気が。強くなってるわね」

「ですから貴女においで頂いたのでですよ」

車は男が運転していた。彼は沙耶香の方を振り返ることなく述べた。

「その為だったのね」

「お金の方は既に口座に払い込んであります」

「ええ、知っているわ」

彼女はそのままの整った形の顎に左手を置きながら窓を見ている。窓の外風景から目を離すことなく言葉を返した。

「九桁とは思わなかったのだけれど」

「些細な気持ちです」

「些細な、ね」

「このお話はお金の問題ではありませんから」

「それよりももっとと大事な問題ね」

「そういうことです」

相変わらず男は振り向くことなく言葉を返す。見ればバックミラーでも沙耶香を見ることはない。ただ前を見据えて車を運転していたのだ。運転しながら話している。

「わかったわ」

沙耶香はそこまで聞いたうえで言葉で頷いた。

「どのみちお金は受け取ったし」

「宜しいですね」

「この世界では契約は絶対だから」

その目は相変わらず窓の外に向けられているが心は違っていた。

「喜んでね」

「有り難うございます。あの方も喜びになられるでしょう」

そうした話をしながら沙耶香を乗せた車は鎌倉の郊外を進む。そ

して一軒の古めかしい洋館の前で止まった。

正確には洋館を囲う壁の玄関であった。建物はあまりに大きく、まるで城の様であり庭も広大なものであったがそれを囲う壁はまるで城壁の様であった。

その門はまるでロココ式のように壮麗であった。銀色に輝くその門の前で沙耶香は車から降りた。

「中には入らないのかしら」

沙耶香は共に車から降りてきた男に顔を向けて問うた。

「はい。それよりも御覧になって頂きたいものがあります」

「何かしら、それは」

「庭にございます」

男は言った。そして門の端にあるボタンのスイッチを押した。

「どなたでございますか」

女の声が返ってきた。男はそれに応える。

「私だ。あの方を御連れしてきた」

「左様ですか。それなら」

「うん」

それに従う形で門が左右に開かれた。そして沙耶香を出迎えるのであった。

「こちらです」

男が手で門の中を指し示す。遙か彼方にあの洋館が見える。庭は左右対称であった。館だけでなく庭までもヨーロッパ式であった。

「車はどうするのかしら」

「他の者がなおしておきます」

「そう。じゃあこのまま中に入っているのね」

「どうぞ」

「それじゃあ」

沙耶香は男に案内され玄関をくぐった。その足でそのまま先へ進んでいく。やがて彼女をかぐわしい香りが包み込んだ。

「この香りは」

彼女はその香りを知っていた。

「薔薇の香りね。しかも赤薔薇」

「おわかりですか」

「ええ。薔薇は好きな花だから」

そう言いながらその切れ長の黒い目をさらに細める。

「すぐわかるわ」

「ここにあるのは赤薔薇ではありません」

「他の薔薇も」

「はい。白もあれば黄色もあります」

男は語る。

「黒も。そして青も」

「青い薔薇も」

「左様です」

「本当に薔薇が好きなのね、あの方は」

沙耶香はそこまで聞いて今度はその紅の唇を微笑ませた。それは純粋な笑みではなく妖艶さと倒錯を兼ね備えた誘う様な笑みであった。まるでそれで誰かを悪の道に誘惑する様な。

「できたばかりの薔薇まで入れるなんて」

長い間青い薔薇というものは存在しなかった。薔薇の中には青色を拒絶する遺伝子が存在する。その為青い薔薇というものは存在しないのだ。その証拠に青い薔薇というのは不可能という意味も含んでいるのだ。

だが今ではそれが誕生したのだ。そして庭に飾られている。人の手によって生み出された美の一つである。

「五つの色の薔薇で庭を飾っているのね」

「庭だけではありません」

「あら」

「飾っているのは。この館全てなのです」

「それは素晴らしいこと」

「いや、薔薇よりさらに素晴らしいものがありますよ」

ここで前から一人の男が沙耶香の方に歩いてきた。

第二章

「あら」

沙耶香はその男を見てまた目を細めさせた。

「貴方も。呼ばれていたのね」

「はい」

男は彼女の言葉に返事をした。

「運命というやつですかね」

「さて、それはどうかしら」

その言葉に対して沙耶香はシニカルなものを含んだ笑みと言葉で返した。

「貴方に会うのは。違うのじゃないかしらね」

「カードはそうだと行ってましたよ」

彼は懐から一枚のカードを取り出してきた。それは運命の輪、タロットカードの中の一枚であった。

「そしてこれと」

またタロットカードを出してきた。今度は恋人のカードであった。

「これが何よりの証拠だと思いますが」

「リバーズにはなっていないのね」

「あしからず」

彼は言葉を返した。

「どちらも正しい方向になっています」

「まあ、占いだから」

沙耶香はそれを見ても涼しい態度を崩さなかった。

「何とでも言えるわね。特にタロットは」

「タロットは人の運命を導くものですよ」

男は沙耶香に反論してきた。

「人の運命をね。そのカードの中に」

「では速水さん」

ここでようやく男の名を呼んだ。

裏地が赤の白いコートの下は青いスーツとネクタイ、白面を持ち顔の左半分を自身の黒髪で覆っている。謎めいた美貌を持つ男であった。

彼の名は速水丈太郎、タロット占い師にして退魔師でもある。彼は沙耶香とは何かしらの因縁を持っているようである。

その因縁とは何か。だが二人はここではそれに直接は触れなかった。

「どちらにしろ。相当厄介な話のようね」

「何故そう言えるのですか？」

「私がいて。そして貴方がいるからよ」

沙耶香は答えた。

「それでどうして。厄介じゃないって言えるのかしら」

「おやおや」

速水はその言葉を聞いて肩をすくめておどけてみせてきた。

「私がいて貴方がいるだけでそれとは」

「実際にそうじゃないかしら」

沙耶香はまた言った。

「二人がいて何かなかった試しはないわ」

「これからはわかりませんよ」

速水はそれに返す。

「これからは。私と貴女のラブロマンスがはじまるかも」

「残念だけどそれはないわね」

妖艶に笑ってそれは否定する。

「私に限って」

「女の子だけではないのは知っていますよ」

「ええ、それはね」

それは認めた。

「私は。どちらでもいけるから」

沙耶香は女性だけではないのだ。相手が男であっても構わない。

相手に感じるものさえあれば。だが今はもっぱら女性なのだ。それは彼女の嗜好とその時の気分によってである。

「では私は間違いなく」

「それはどうかしら」

その返答はしなかった。

「わからないわね」

「残念なことですね、全く」

「して松本様」

「ええ」

それまで黙っていた男は二人の会話が終わったのを見て声をかけた。

「宜しいでしょうか」

「ええいいわ」

沙耶香はそれに応える。そして速水をそこに置き洋館の中へ入っていくのであった。

洋館はまるで宮殿の様に広い。入り口の扉は檜の木できており見るからに頑丈そうである。その扉がゆっくりと開くとそこから見えるのは暗い館の中であった。沙耶香は今男に案内されその中に入った。

第三章

館の中は木造であつた。床や階段、手すり、扉等は全て檜の木であり壁は白い。天井にもガラスの豪華なシャンデリアがありそれが古ぼけた鈍い輝きを放っていた。まだ昼なので光が灯っていないせいかそれは朧な印象を与えるものであつた。

沙耶香はそのシャンデリアを見上げていた。見たところガラスもかなり高価なものである。しかも年代ものだ。建物自体に相当な年代がある以上シャンデリアもそうなのは当然であると言えた。彼女は暫しそのガラスを見えていた。ふるぼけた朧な輝きはそのブラックルビーの瞳にも入つて来ていた。

「こちらです」

沙耶香はそのガラスについてさらに考えようとした。何時頃のガラスなのかと。それを考えようとした時に男が声をかけてきたのであつた。

「ええ」

意識を男に戻し応える。そして彼に案内されてこの古い館の中を進んでいく。

暗い廊下であつた。左右に灯りがあるがそこには当然ながら光はない。みればその灯りはガス燈であつた。今だにこんなものがあるとはある意味驚くべきことであつた。

「古風ね」

沙耶香はそうした洋館の中を見ながらふと呟いた。

「何もかもが」

「ガス燈がですか？」

「それだけじゃないわ」

彼女は男に応えた。二人が歩くとそれだけで廊下がきしむ音がした。

「この館にある全てのものが」

「あの方の御趣味で」

「クラシックなのね」

「ええ、全てにおいて」

「話に聞いた通りだわ」

沙耶香はそれを聞いて笑みを浮かべた。

「古風なのを好まれる方だと」

「だからこそこの鎌倉におられるのですよ」

「鎌倉に」

「はい」

男は答えた。

「ここにはかつて華族の方々が多くおられましてね」

実際にこの鎌倉の辺りには洋館や別荘を構える華族達が多かった。

この街は歴史が古く、また山と海を持つ風光明媚な場所である為人

気があつたのだ。だから華族達の邸宅や別荘があつた。この洋館も

その中の一つなのである。

「それで。あの方も」

「おられるというわけね」

「そういうことです」

「わかつたわ」

沙耶香はそれに頷く。

「そして薔薇があり」

「はい」

「美しい庭もある。何もかもがあの方の望まれる世界なのね」

「ですがその世界が今壊れようとしているのです」

男の言葉は深刻な色合いを帯びた。

「ですから貴方と速水様を」

「呼んだということね」

「そうです。詳しいことはあの方から御聞き下さい」

「あの方から直接」

「ええ。是非にと仰いまして」

「そうでしたの。では余程重要なものがありますのね、本当に」
「こちらです」

二人は一際大きな扉の前に来た。その扉からは妙な威圧感が感じられた。

「駕籠様」

男が扉の前で扉の向こうに声を送る。

「松本沙耶香様を御連れ致しました」

「うむ」

扉の向こうから老人のしわがれた声が返って来た。それが返事であった。

「御案内しろ」

「はい」

姿は見えていないというのに恭しく一礼する。それから沙耶香に顔を向けた。

「どうぞ」

「ええ」

男が扉を開ける。そして沙耶香はその開けられた部屋の中に入る。その部屋の中に一人の老人がいた。

広い部屋だった。床はやはり檜の色をしており壁は広い。奥に書斎の机がある。その机は黒檀であり、黒くツヤのある光を放っていた。その後ろは全て窓であり透明なガラスが白い太陽の光を入れていた。老人は書斎机の前に車椅子で座っていた。白く、すっかり薄くなった髪を持つ、品のいい顔立ちの老人であった。白いカッターの上にダークブラウンのベストを着て黒いズボンを履いている。そしてその上に赤いガードイアンをかけていた。

「御久し振りです」

沙耶香はまずはその老人に挨拶をした。

「御元氣そうで何よりです」

「そちらこそな」

老人もまた沙耶香に挨拶をした。

「相変わらず。美しい」

「また。お戯れを」

「戯れではない。その黒い美貌にさらに磨きがかかったな」

彼は沙耶香の姿を見て微かに笑みを作っていた。

「前に会った時は影であったのに今では闇だ」

「闇、ですか」

「そうだ、まるで闇に咲く薔薇だな」

彼は沙耶香を評してこう述べた。

「その美貌で。また多くの少女達を味わってきたのだろう」

「味わうのは少女だけとは限りませんが」

沙耶香は謎めいた笑みをここで浮かべて言った。

「私にとっては。花は若い花も熟した花もどれも美しい花ですから」

「そちらも相変わらずのようだな」

「ええ。そして花は一つとは限りません」

「成程、君の嗜好は変わってはいないようだな」

「安心されましたか？」

「とりあえずはな。変わっていないくて何よりだ」

「有り難うございます」

「さつきは速水君に会ったよ」

「ほう」

それを聞いた沙耶香の目が動いた。だからあの時彼はあそこにいたのだ。

「彼も今回ここに招待してね」

「左様でしたか」

「庭で会ったと思うが」

「はい」

言葉で頷く。身体は動かさなかった。

「久し振りに。話をしました」

「彼も変わっていないかったよ」

「どうやらその様で」

「相変わらず。君に深い関心があるようだね、彼は」

「彼には私は合わないと思うのですがね」

「それはまたどうしてかね？私はバランスがいいと思うのだが」

老人は面白そうにその皺の顔に笑みを浮かべて言った。

「当りきつての黒魔術師と占術師なのだから」

「術では確かに釣り合っているでしょう」

沙耶香は速水の能力は認めていた。

「ですが」

「ですが!？」

「今の私には。彼に心が向いてはおりません」

「心が向いていないか」

「ですから。今は彼の申し出には受けられないのです」

「そうか。心の問題か」

「そうです」

沙耶香は答えた。

「彼にとっては残念なことです」

「だが。今回の仕事は協力してもらわなければな」

「わかっています」

その言葉に静かに応えた。声は闇の中に溶け込む様に静かに部屋に響いた。

第四章

「それで今回の話は」

「うむ」

老人はここで態度を改めた。そして真剣な顔で沙耶香に語りはじめた。

「薔薇だ」

「薔薇」

「そうだ。この屋敷にある五つの色の薔薇だ」

老人は言った。

「赤、白、黒、黄、そして青だ」

「その五色の薔薇で何があるのでしょうか」

「これは速水君にも言ったが」

「はい」

話はまた一つ深い場所に入った。

「手紙が来ているのだ」

「手紙が」

「うむ、これだ」

それは流麗な、女性、若しくは若い中性的な男性を思わせる字であった。白い和紙の上に黒い墨で書かれている。そこに薔薇のさだめに従って五人の生贄が捧げられる時に時は来るとあった。

「また随分風情がありますね」

「君もそう思うか」

「はい。最近は文字を切って貼ったり、パソコンで入力したりとそんなものばかりですから」

沙耶香はここではそうした文明の利器を残念がった。

「こうした手紙は。やはりどんな場合であつても」

「筆で書かれるのがいいというわけだな」

「私はそう思います」

それが沙耶香の考えであった。彼女はその黒い瞳を微かに動かして述べた。

「五人の生贄ですか」

「薔薇のさだめに従ってな」

「薔薇という死を意味する花でもあります」

沙耶香は薔薇という花を知っていた。この花は華麗な外見と共に死をも内包しているのだ。薔薇が散る時にその散っていく花びらから死を連想するからであろうか。

「その五人の生贄に五色の薔薇」

「繋がるな」

「ええ。まずはそれが最初のヒントですね」

沙耶香は言った。

「まだ犯人はわかりませんが。これからするであろうことはわかります」

「そして君達に頼むことは」

「この事件の解決と謎の解明」

「そうだ。頼めるか」

「私は契約により動く者ですから」

「わかった。それでは頼むぞ」

「わかりました」

こうして沙耶香は老人の申し出を正式に受け入れこの謎に挑むこととなった。話が終わり部屋を後にする。ここで男が沙耶香に声をかけてきた。

「それで御部屋ですが」

「何処かしら」

寝泊りの為の部屋まで用意してくれている。かなり用意がよかった。

「こちらでございます」

彼はその言葉に応えて沙耶香をまた案内しはじめた。一階から玄関の入り口の辺りにあった階段を使い二階に昇っていく。階段は重

厚な作りであり年代と共に頑丈さと、そして風情を確かめさせるものであった。

沙耶香は男に案内され二階へと辿り着いた。そこは一階よりもまだ暗く、そして多くの部屋があった。

「何分古い部屋ですが御辛抱下さい」

「むしろ嬉しいわ」

「そうなのですか」

「こうした古い洋館の中にいるのはね」

彼女はうつすらと笑っていた。

「趣きがあるわ。レトロな感覚で」

「左様ですか」

「ええ。だからそれは心配しないで」

沙耶香は言った。

「むしろ気になるのは」

「お酒ならふんだんに用意してありますので」

「わかっているのね」

「あの方からのたつての御言葉で」

彼は答えた。

「上等のワインにブランデーを用意しておきました」

「有り難う」

沙耶香は酒があると聞いてその頬をほころばせた。やはり妖艶な笑みであった。

「それじゃあまずは部屋を」

「はい」

男は二階を進む。そしてその中のある一室の前にやって来た。

「こちらでございます」

「ここね」

「はい。御客様用の部屋でございます」

言いながらその部屋の扉を開ける。その中はホテルの客室と見紛うばかりの古風でかつ豪華な佇まいの部屋であった。

木製のシックなテーブルと椅子がありベッドは天幕が付いている。窓には白いシルクのカーテンがあり広く、全体的に落ち着いた雰囲気がある。沙耶香の趣向に合せたかの様な部屋であった。

「如何でしょうか」

「いいわね」

その切れ長の目を細めていた。

「御風呂場と御不浄は別にありますので」

「そうなの」

「それを使われる場合はまた。家の者を御呼び下さい」

「ええ、わかったわ」

それに応えて頷く。

「それじゃあまた後で」

「はい。あつ、言い忘れていたことがあります」

「何!？」

「御食事や御酒はルームサービスになっておりますので」

「ルームサービスね」

「ええ。ですから部屋でお待ち下さい。もうすぐ夕食が運ばれてきますので」

「少し早いではなくて?」

懐中時計を見た。見ればまだ六時であった。

「そうでしょうか」

「ええ。そう思っけれど」

「それでは時間を遅らせましょうか」

「もう料理は作りはじめてるのかしら」

「そうだと思いますが」

「そう。だったらいいわ」

「そのままお持ちして」

「お願いするわ。それじゃあ」

「畏まりました」

男は一礼して部屋を後にした。それから暫くして黒い髪を肩の高

さで切った黒い服のメイドがやって来た。まだ幼さの残る初々しい顔立ちである。

「お待たせしました」

「ルームサービスね」

「はい。御料理と御酒です。御酒は」

「赤ワインね」

銀の覆いをどけるとそこから鴨をメインディッシュにしたフルコースと赤ワインが姿を現わした。沙耶香はそれを料理が出される前に言い当てたのであった。

「その通りです。よくおわかりになりましたね」

「勘よ」

沙耶香はにこりと笑ってそう答えた。

「当たったようね」

「鴨には赤ワインが合いますので」

「そうね」

それに応えながら席に着く。少女はそこにまずはスープを置いた。食器もスプーンも銀であった。その輝く身体が沙耶香の漆黒の身体を映し出していた。銀が白い光ではなく黒い光を放っていた。

沙耶香はスープを口に入れる。それからメイドに声をかけた。

「美味しいわね」

「そう言って頂けるとシェフも喜びます」

メイドはその言葉を聞いてにこりと笑った。純粹な、澱みなぞ全くない明るい笑顔であった。沙耶香はその笑みを見て心の中で思うところがあった。

「それにサービスもいいし。まるでホテルね」

「お客様には真心を、いつも言われていますので」

「そうね。ルームサービスも一つ加えてくれているし」

「といたしますと?」

「すぐにわかるわ」

沙耶香はスープを飲み終えワインを一口含んでから答えた。

「すぐにね。まずは食事を」

「はい」

次はサラダが運ばれた。そしてメインディッシュ、デザートへと。ワインもボトルを一本開けた時にはもう後ろの窓は暗くなり、白い星さえ見えてきていた。

「御馳走様」

沙耶香はナプキンで口を拭った後で言った。

「堪能させてもらったわ」

「はい。それで」

メイドはここで彼女に声をかけてきた。ずっと彼女の側に立って対応していたのである。

「さっきのルームサービスの件ですけれど」

「ああ、あれね」

沙耶香はそれを受けて彼女に顔を向けてきた。

第五章

「加えてくれたルームサービスね」

「はい。それは一体」

「それはね」

沙耶香はここで指を鳴らした。すると扉の鍵が閉まる音がした。

「!?!」

「もうこれで。私達は二人よ」

影の世界の声で言う。

「二人といいますと!?!」

「貴女、知らないのね」

今度はその声を楽しむものになっていた。テーブルに肘を付いて口に手を置いて笑っていた。

「二人きりになったら何をするのか」

「何をですか?」

「いいわ、その純情さ。貴女、彼氏はいるのかしら」

「ええ、いますけれど」

メイドは何も疑わず答えた。これが男ならセクハラになったところだろう。だが沙耶香は女である。だからこそこの言葉は問題にはならない。そして沙耶香もそれがわかって言っているのだ。

「高校の時から」

「そうなの。じゃあ知らないわけではないのね」

「何をですか?」

「決まっているじゃない」

少女を見て言う。

「閉じられた部屋ですることと言えば」

「まさか」

だが彼女はその言葉を聞いて笑った。

「私も御客様も。女ですよ、それなのに」

「それだからよ」

沙耶香の言葉は彼女を離してはいなかった。声が彼女を徐々に追い詰めていく感じであった。

「貴女は。私のものになるのよ」

「私のものになって」

「そうよ」

ここで彼女の目を見た。その黒い瞳が赤く光った。ブラックルビィがルビィになる様に。妖しく光ったのであった。

「!?!」

少女はその目を見て動きを止めてしまった。いや、正確には動けなくなってしまうたのよ。

「怖がることはないのよ」

怯えを見せる少女に対して言った。

「私は貴女を楽しませてあげるのだから」

「けどこれって」

「浮気!? 浮気を怖れているの?」

目が笑っていた。モラルというものを嘲笑する目であった。目の輝きは黒に戻っていたがそれはかえって妖しさを増していた。そうした輝きであった。

「だとすれば。貴女は何もわかっていないわ」

「わかっていないって」

「だって。罪の甘美さを知らないのだから」

既に沙耶香は少女の側にいた。その形のいい顎を白い手にとり上に向けていた。そして整った顔を覗いている。

「罪は。犯すから罪になるのよ」

「浮気も」

「そうよ。罪を犯すこと、そして大切な人を裏切ること」

彼女は語る。

「それがどれだけ甘美なものなのか知らないということ。非常に残念なことなのよ」

「けれど私は」

沙耶香を拒もうとする。

「今は」

「この上なく甘美な果実は裏切り」

だがそんな少女に対して言う。正確に言うならば少女と大人の女の狭間の時にいる存在だった。もうすぐで大人の女になる。だがまだ少女の世界にもいる。そんな存在を今手の中に収めていた。

「そして罪。裏切っている、罪を犯しているという罪悪感と後悔の気持ちを抱きながら味わう楽しみというのはね。一度知ったら忘れられないものなのよ」

「それが……」

「そう、私よ」

沙耶香は言う。

「私は罪、甘美な味を持つ罪」

「ではこのまま」

「そう、堕ちなさい」

誘惑の声はただ放たれたただけではなかった。それは少女の心も捉えていた。

「そして。これまで知らなかったものを知りなさい。いいわね」

「罪を犯す愉しさを」

「愉しさを」

沙耶香はさらに言う。

「知るのよ。いいわね」

「はい」

「じゃあここへ」

少女を天幕のベッドへ導く。それは羽毛とシルクのベッドであった。純白の世界がこれから背徳に染まるうとしていた。

「決められた者以外に、それも女に抱かれるという罪」

沙耶香織は少女の服を脱がせながら言う。脱がせながらその身体に触れることも忘れない。

「その罪深さと、そして甘さを教えてあげる。今からね」
そのまま少女を抱いた。二人で快樂の世界へと入っていった。全
てが終わった時二人は天幕のベッドの中にいた。二人並んでその深
く柔らかい枕に頭を置いていた。

第六章

「どう、女の味は」

少女を味わった後で尋ねる。その尋ねる声は既に答えがわかっている声であった。

「これが。女の人なんですね」

「そうよ」

少女を横目で見て答える。こつ言つのはわかっていた。

「忘れられないでしょ」

「はい」

こくりと頷く。

「何か。男の人とはまるで違った」

「男もいいけれどね。女もまたいいものなのよ」

沙耶香は言う。

「男とは違った味があるのよ。だから女は止められないのよ」

「同性愛、なんですか？」

「いいえ、違うわ」

それは否定した。

「今言つたでしょ。私は男でもいいのよ」

「そして女でも」

「そうよ。墮とせる相手なら誰でも」

その目が妖しい光を放つていた。その光こそが沙耶香の光であった。普通の世界にはない光、強いて言うならば魔界にある光であった。人を、それも何も知らない純粋な人を悪の道へと誘う、そうした光であった。

「いいのよ。それが私なの」

「はあ」

「よかったわ、私も」

そのうえで少女に声をかけた。

「また機会があつたらね」

「はい」

「こうなりましょう。いいわね」

「はい、また」

また一人女を抱き己の背徳の道へと誘つてしまった。彼女にとってはそれは愉しみであり止められないものであった。少女がベッドから出て服を着て部屋を出ても暫くはベッドの中にいた。

そのまま煙草を吸いながらベッドの中で寝ていたがやがて扉をノックする音が聞こえてきた。そのノックの主が誰であるか直感でわかった。

「少し、いいですか」

「ええ」

それに応えた。するとそれに応える形でノックの主が部屋に入つて来た。

入つて来たのは速水であった。彼は涼しげな顔で部屋に入つて来た。

「おや」

まずはベッドの中で煙草を吸っている沙耶香に気付いた。

「また。楽しまれていたのですね」

「少しね」

沙耶香もそれを隠すことはなかった。にこやかな笑みでそれに返した。

「愉しませてもらったわ」

「左様ですか。相変わらずお好きなことで」

こうしたことには慣れているらしい。彼はベッドの中の裸の沙耶香を前にしても何ら変わったところはなかった。

「また。女の子ですか」

「わかるのね」

「ええ。香りだね」

速水はくすりと笑つてこう述べた。

「わかりますよ。この香りはまだ少女ですね、いや」

実は彼は香りではなくそこに残る気配を探っていたのだ。これは彼や沙耶香だからこそわかるものであった。

「少女から大人の女の人へなっていく。そんな時にいる人ですかね」
「御名答」

沙耶香はここまで聞いて微笑んだ。煙草をすつと闇の中へと消す。
「その通りよ。流石ね」

「これ位ことは僕でもわかりますよ」

「それじゃあ。もっと他にもわかることはあるかしら」
「はい」

速水はその問いに答えた。

「御心配なく。その為に来ましたから」

「じゃあここで見せてくれるかしら、それを」

「無論。それではこれで」

コートのポケットからカードを取り出した。タロットの大アルカナの二十二枚のカードであった。

「これで調べてみましょう。何で出して欲しいですか」

「占い方はどれでもいいわ」

沙耶香はそれには頓着しなかった。

「何でもね。好きなので出して」

「わかりました。それでは席をお借りしますね」

「ええ」

「本当は。貴女が今いる場所で二人で占いたいのですけれどね」

「生憎そんな気分じゃないのよ。悪いわね」

「やれやれです。それでは」

テーブルに座る。そしてそのカードを一旦宙に舞わせた。大アルカナの二十二枚のカードが輪となって彼の周りを巡りはじめた。まるで生きているかのように。

第七章

「舞いなさい、カード達よ」

彼はカードに対して言う。

「そして我が問いに答えるのです。これから私達が出会うことは何か」

「私達、ね」

「ええ」

速水は沙耶香の言葉に笑った。整った微笑であった。

「今回は協同作戦ですからね」

「そうね。幸か不幸か」

「私にとっては幸ですが」

「じゃあ私は。どうなのかしらね」

そんな話をしているうちにカードの動きは止まり十枚のカードがテーブルに舞い降りた。そこにはケルト十字の占いが為されていた。タロットにおいてオーソドックスなものの一つである。

「まずは一枚目ですね」

「私達がどういった状態にあるか」

「恋人、と出て欲しいところですが」

「それだと話が違ってくるわよ」

「そうした状況で占っているのではないのが残念ですね」

そんな話をしながらカードを裏返す。出て来たのは運命の輪であった。

「ふむ」

速水はそれを見てまずは考える顔になった。口に手を当てていた。

「今から大きく動きそうですね」

運命の輪は絵からもわかる通りその運命の進展を表す。正しいものであれば好転を、逆であれば暗転をだ。もっともそれ以外に全てのはじまりを感じることもある。速水はこの時ははじまりを感じて

いた。

「二枚目は」

「キーカードね」

沙耶香は二枚目がめくらられるのを見て言った。そこにはこの件に
関しての糸口が示される。それは教皇であった。

「五番目のカード」

教皇はタロットのナンバーでは五枚目なのである。彼はそれを言
ったのである。

「そして学識ですか」

「キーになるのはそれ、ね」

「はい。三枚目は私達がどうしたいのか」

「それはわかっているわね」

「ええ。それは」

星であった。希望、即ちこの件の解決である。

「しかし隠された方向性は」

それは四枚目に現わされる。そこにあるのは月であった。不安や
焦燥といったぼんやりとした不吉なものを表わす。あまりいいカー
ドではない。

「この件。まさか」

「次は？五枚目ね」

沙耶香はそれに構わず次を裏返させた。そこに出ていたのは恋人
の逆であった。浮気や別離、そういった実らないものを表わす。

「これはまた妙な」

速水はそれを見てまた考え込んだ。

「はじまったばかりだというのに」

「どういふことかしら」

これには沙耶香も首を傾げさせていた。ベッドの中で怪訝そうな
顔をする。

「ここまでになるのに何か実らないものでもあったのかしら」

「そして。それを実らせる為に」

「ということなのかしら」

「何か読めませんね」

速水も彼女と同じく首を傾げさせた。

「これは。どういったものか」

「そうね。けれど次お願いするわ」

「わかりました」

六枚目はどういふふうになるか。未来の流れである。それは塔の逆であった。破滅、窮地といった最悪の意味である。塔のカードは正でも逆でも意味はさして変わらない。最悪のカードである。

「前途は多難みたいね」

「ですね。それはわかります。そして今私達が置かれているのは、またしても逆であった。世界の逆。既存のことが成り立たなくなるか、袋小路に入る。やはりいい意味のカードではない。世界は本来は非常に素晴らしいカードのだが逆になるとこうなるのだ。」

「やはり。厄介な話みたいですね。では周りの状況は」

それが八枚目である。今度は悪魔であった。

「……これは直接感じました」

速水はカードを見て言った。

「今回の件は魔性ですね」

「やっぱりそうなるのね」

それは沙耶香も感じる。そもそもそうでなければ二人が呼ばれる筈もないのだから。

「では解決出来るのか」

九枚目、そこにあつたのはまたしても逆のカードであった。十三番目のカード、死神であった。これは実は悪いカードではない。正ならば復活、逆ならば再生である。

「発想の転換を試みる、ですかね」

「そうみたいね」

「ただ、どうにも教皇と関係がありそうですね」

速水はこれも感覚で感じていた。

「二番目のカードと」

「はい。五、ですか」

彼はそれを頭に留めることにした。そして遂に最後のカードを裏返す。そこにあったのは隠者であった。静かな、表に表われるものではない知性を表わす。カードはそれで終わりであった。

「最後にはちよつと以外ですね」

「隠者の正。どうなるのかしらね」

「ま、悪いカードではなくて何よりです」

まずはそれに安堵した。

「ただ。厄介な話にはなりませんね」

「そうね。それでも」

沙耶香はベッドから起き上がった。起き上がりながら指を鳴らすとそれで服がその身に纏われた。あの漆黒のスーツであった。ネクタイはやはり赤であった。

「魔法ですか」

「下着もちゃんと着けているわよ」

「そんなものなくともいいですよ」

「何度も言ってるでしょ。まだ貴方には何も感じないのよ」

「私に魅力がないと」

「それは違うわね。貴方には十分な魅力があるわ」

ベッドから出ながら言う。それは認めていた。

「けれど」

「けれど？」

「それだけでは駄目なのよ。私が人を好きになるのにはね」

「複雑な方です」

速水はその言葉を聞いてうつつすらと笑った。

「数多の少女や美女達は味わうというのに」

「味わうのと愛するのは別よ」

それが沙耶香の返事であった。

「また違うわ。貴方ならわかるでしょう？」

「確かに。それでは今はまだ、ということだ」

「ええ。ところでお酒がまだあるけれど」

「お酒ですか」

「メイドさんがね。持って来てくれたものよ」

速水と向かい合ってテーブルに座る。そして指を鳴らすとふわふわとボトルとグラスが二つずつ姿を現わして飛んで来た。そのまま速水がタロットをなおしたテーブルの上に行って来た。

「ワインよ、赤の」

「赤ですか」

「ワインは好きだと思っていたけれど。違つのかしら」

「いえ、好きですよ」

速水は口だけで笑ってそれに答えた。

「ただ。何か特別な気がしましてね」

「どういふことかしら」

「貴女と二人で飲むからですよ。これがどうも」

「私と飲むと味が変わるのかしら」

「はい。甘いワインはまるで蜜の様に、辛いワインはまるで薔薇の花の様に」

速水は言う。

「その味を変えます。このうえなく美味に」

「お世辞かしら」

「いえ、お世辞ではないです。この赤にしるそれまでの赤から宝石の赤になります。そう、まるでルビーをそのまま溶かした様な赤に」

「その宝石を飲む気持ちはどうかしら」

「私にとっては。至上の喜びです」

「わかったわ。では飲みましょう」

「はい」

「これからの宴の前祝いに」

「黒と影の世界の為に」

「乾杯」

二人は杯を打ち合わせた。そして酒の甘美な世界へと入った。

第八章

酒は瞬く間に飲み干された。二人は少し赤い顔になっていた。

「まだ。飲めるかしら」

「勿論ですよ」

速水は沙耶香に言葉を返した。二人は口元だけで笑い合っていた。
「ですが。一つお話したいことがあります」

「何かしら」

「この屋敷にいる人達ですよ。把握しておられますか？」

「いえ、まだよ」

沙耶香は素直に答えた。

「屋敷に案内してくれたあの男の人とあの方。そして」

「貴女と褥を共にされたあの少女」

「今わかっているのは三人だけね。けれどそれだけじゃないわよね」

「はい。家にはまだ何人かおられますよ」

「何人も」

「ええ。メイドの方が何人か、他にもね。女性の方が多いようですね」

「それはいいことね」

「おやおや、まだ味わい足りないのですか」

「味わうものは一つだけとは限らないわ」

沙耶香は言う。

「一つのを一度だけ味わうのは私の主義じゃないわ」

「多くのものを何度でも、ですね」

「そうよ、それはわかってくれてるわね」

「はい。まあそれはいいです」

速水はそれには構わなかった。沙耶香の嗜好はよくわかっていたからだ。

「名簿、御覧になられますか」

「あるのね」

「はい、こちらに」

彼が腕を掲げると隠されている顔の左半分の目の部分が黄金色に光った。その光が手の平に当てられるとそこに一冊のファイルが現われた。

「どうぞ」

「有り難う」

沙耶香はそのファイルを受け取った。それを開いて中を見る。

中には何枚かの写真と多くのデータがあった。その中にはあの男のものもあった。

「あの人は野島さんというのね」

「そうですね、そこに載っていますね」

「野島栄一、覚えておくわ」

「他にも」

「結構多いわね」

沙耶香はファイルを見続けながら言った。

「思ったよりも」

「そうですね。私もこれ程大勢の方がおられるとは思っていませんでした」

速水も答えた。

「意外と多いものです」

「何人かは住み込みなのね」

「それもデータに書かれていた。」

「ええ、そのようですね」

「待遇はかなりいいのね」

「あの方は気前のいい方ですからね。当然でしょう」

「そうですね。それにしても」

「可愛い女の子が多いと」

「ええ」

沙耶香の笑みが妖艶なものとなった。

「嬉しいわね、何かと」

「またそれですか。お好きなことで」

「今回もまた。仕事の合間には困らないわね」

「いい加減私に振り向いてもらいたいものですが」

「それは何時かね。それじゃあ今日はこれまでで」

「そう言つてファイルを速水に返した。それから席を立った。

「どちらへ？」

「寝る前に。身体を清めておきたいの」

「御風呂ですか」

「そうよ。貴方はどうするの？」

「御一緒に。と言いたいところですがそれはいささか露骨ですね」

「分かれているそうよ」

「まあそうでしょう。それに私はもう入りましたし」

「じゃあ私は行くわ」

「どうぞ、では私もこれで」

速水も席を立った。そして自室に戻る。そして沙耶香も風呂場へと向かった。部屋には一時誰もいなくなったがやがて沙耶香が戻った。彼女は下着だけになりベッドの中に入った。灯りを消し眠りに入ったのであった。

次の朝目覚めるとすぐにベルを鳴らした。昨夜のメイドが部屋にやって来た。

「おはよう」

「おはようございます」

沙耶香が笑いかけると彼女は頬を赤らめさせた。昨夜のことを思い出したのであった。

「昨日はよく眠れたかしら」

「は、はい」

沙耶香の言葉に戸惑いながら答える。沙耶香はそうした少女の様子を見ておかしそうに笑いながらベッドから出た。黒いブラにシヨ
ーツであった。

「服は自分で着るから」

「はい」

沙耶香の言葉に頷く。彼女は自分で言った通りベッドから出て服を着はじめた。白いカッターに赤いネクタイ、そして黒いスーツであった。髪は指をパチンと鳴らすと上にあがった。そしてそこで纏まったのであった。

「他の身支度は後でするとして」

「ご朝食ですか？」

「そうよ。今朝は何かしら」

「ソーセージとハム、チーズ、それにトーストです」

「トーストね」

「御飲み物はミルクですが。如何でしょうか」

「いいわね。私の好きなものばかりよ」

沙耶香は全部聞いたところで目を細めさせた。そしてテーブルに着いた。

「では頂こうかしら」

スーツの上にナプキンをしながら少女に言った。

「そのトーストをね」

「付けるのは何に致しますか？」

「何があるのかしら」

「色々ございます。ジャムにマーマレード、バターにマーガリン。

ジャムにはストロベリーにオレンジ、それとブルーベリーとメロンがございます」

「豪勢ね」

「それにローズ」

「薔薇ね」

薔薇と聞いて沙耶香の目がまた細まった。

「薔薇のジャムとは洒落てるわね」

「薔薇は食べられますので」

「ええ、それは知っているわ」

沙耶香は少女の言葉に応えた。テーブルの上に右の肘をつけてその手の甲に形のよいそのあごを乗せていた。

「ローマ帝国の頃からね。食べられていたわ」

「そうだったのですか」

「何時から食べられていたのかは知らなかったのかしら」

「申し訳ありませんが」

少女は俯いて答えた。

「いいわ、それはまた教えてあげる」

沙耶香はそれを聞いてこう返した。

「後で。二人つきりでね」

「二人つきりで」

「嫌なのかしら」

「い、いえ」

それをまた顔を赤くして首を横に振って否定する。だがそれは拒む態度ではなかった。

「もし宜しければ」

顔を赤くさせ、視線を横にやって述べた。

「お願いできますか？」

「ええ、わかったわ」

その言葉を聞いてまた妖艶に笑った。あの時の笑みであった。

第九章

「けれどそれは後でね」

「はい」

「今は。朝食をお願いするわ」

「それでトーストには何を付けられますか？」

「あつ、そうだったわね」

少女の言葉でそれを思い出した。

「それじゃあ。ジャムをお願いするわ。ローズでね」

「畏まりました」

少女はそれを受けてジャムを取り出す。それは赤いローズのジャムだった。

「綺麗な薔薇には棘がある」

沙耶香はその赤いジャムを見て呟く。トーストに綺麗に塗られ、茶色いパンが赤く染まっっていく。

「そして時にはそこにあるのは棘ばかりじゃない」

呟いているうちに朝食がはじまった。それが終わってから残りの身支度を整え部屋を後にするのであった。

部屋を出てまずは庭に出る。そこにはもう速水がいた。

「やあ、おはようございます」

「お酒は残っていないみたいね」

沙耶香もそうだが見れば彼も同じであった。

「まるで昨日は何事もなかったかみたい」

「実際に何もありませんでしたからね」

速水はそれに応えてにこりと笑ってきた。その整った顔ににこやかな笑みが浮かぶ。

「残念なことに」

「期待は強いだけ絶望は大きいわよ」

「期待が強い程その後の幸福は大きいというのは聞いたことがあります」

ますが」

「強情ね、本当に」

「おかげさまでね」

二人は笑みを返しながらやりとりをする。今二人は薔薇の園にいた。

「それにしても五色の薔薇とは」

速水もその五色の薔薇に見惚れていた。

「見事なものです。しかも青い薔薇まで」

「本来はなかった花ね」

「ええ、青い薔薇は不可能の意味もありますから」

この言葉は速水も知っていた。

「ですがそれが新たに作られた」

「それでここには赤、白、黒、黄、そしてこの青い薔薇の五つがあるのね」

「ですね」

沙耶香は薔薇を手を取っていた。それはその青い薔薇であった。

「不思議な色をしているわね」

薔薇を見て言う。青とはいうが正確には青紫と言うべきか。だが青い薔薇であることには変わりがなかった。彼女は今その薔薇を見ていた。

「現実にはない様な」

「それを言うならば薔薇そのものがですね」

速水もその青い薔薇を見ていた。そして述べる。

「有り得ない程の美をたたえています」

「有り得ない、かしら」

「はい」

沙耶香の言葉に頷く。

「薔薇の色は決して純粋な色ではありません。そこには何か宿っています」

「何か」

「そう、何か。美の中にありながらそこには恐ろしさも併せ持つ。それが薔薇というものですから」

「神妙な言葉ね、何か」

「神妙というか私個人の考えですよ」

速水は言った。

「あくまでね。私の考えです」

「薔薇は恐ろしい花、ね」

「見る者を惹き付けて離さない。そこにまず魔性があります」

「魔性が」

「純粋な色ではなく、そこには艶が必ず含まれている。それによっても人の心を捉える」

その言葉は続く。

「そうした花は他にはありません。薔薇だけです」

「薔薇だけ」

「これ程までに濃厚な退廃と魔性を含み、なおかつ美しく誘うのは。他にはありません」

「えらく薔薇は好きなのね」

「花は。どれも好きです」

速水はうつすらと笑ってこう述べた。

「どの花もね。ですが薔薇は特に」

「その薔薇が誘う魔は確かにあるわね」

沙耶香はそう言葉を返した。

「薔薇そのものが魔性なのだから」

「はい」

「この五色の薔薇が。果たして私達に何を見せるのかしら」

「さて」

「魔性が、それとも退廃か」

沙耶香は薔薇の園を眺めながら言う。

「それとも他のものか。何でしょうね」

朝の薔薇は何も語らない。だがそこには確かに何かがあった。薔

薔薇は何も語らずに二人を見ている。二人にもそれはわかっていた。二人は薔薇のその魔性の誘惑を感じながら園にいたのであった。

薔薇の園のかぐわしい香り。それは日が高くなるにつれてその強さを増していくようであった。二人はそれを感じながら館を、そして庭を巡っていた。そして遂に最初の事件が起こったのであった。

「むっ」

それを最初に見たのは速水であった。この館には礼拝堂もある。何代か前の主は敬遠なクリスチャンであった為にそこに作らせていたのである。今では教会としても使われており神父とシスターがいる。事件はその教会で起こったのであった。

第十章

その時神父は館に用事があり教会にはいなかった。そこにいたのは一人のシスターだけであった。若く、美しいシスターである。最初の犠牲者は彼女であった。

「これは……」

彼はそれを見てすぐに懐から取り出した。それは吊るし人の逆であった。

「行きなさい」

そのカードをすぐに投げる。するとカードは自然に空を飛び教会を出て行く。そのまま庭にいた沙耶香のところにまでやって来た。

「相変わらずね」

沙耶香はそのカードを受け取ってまずはそう呟いた。

「洒落た知らせだこと」

速水の趣向と術はわかっていた。そのうえで呟いた言葉である。

そしてカードの意味は。沙耶香の整った顔を微かにではあるが歪ませるには充分であった。

「してやられたわね」

眉が微かに動いた。声も普段のクール、いや冷徹な響きを持つものとは違っていた。

「最初は。じゃあ今からそっちに行くわ」

カードに対して言う。

「わかったわね。じゃあ先に帰っていいわ」

カードを離す。するとカードはそれで教会に舞っていく。彼女は自然とその後教会に向かうのであった。

左右、そして礼拝堂の後ろに青と黄、それに緑のスタンドガラスが眩い光を教会の中に導き入れていた。左右対称に木造の椅子が並び、礼拝堂の中央にはあの十字架がある。沙耶香のあまり好きではないあの主がそこにいるのだ。

「来て下さりましたね」

その下には速水が立っていた。彼女が教会にやって来たのを見て振り向く。

「御覧の通りですよ」

「また。大層なことをしてくれるわね」

沙耶香はそれを見て言った。

「こんなことをしてくれるなんて」

「やはり。薔薇ですか」

速水はその薔薇を見据えて沙耶香に言う。薔薇は十字架にあった。

十字架は赤い薔薇一輪で飾られていた。血が滴り落ちるような紅の薔薇が一輪。そこにあった。若い清らかな美貌を持つ一人の乙女の胸に。

十字架には教会のシスターがかけられていた。心臓に紅い薔薇を打たれていた。両手と両脚は薔薇の緑の茎で止められ、棘がその全身を止めていた。彼女は主のいる筈のその十字架に自身がかけられていた。閉じられた目は開くことなく、そして白い顔でそこにかけていた。ステンドグラスから差し込む色とりどりの光が彼女の亡骸を後ろから、左右から照らし出していたのであった。

「キリストを真似たのかしら」

「ではこの赤い薔薇はロンギヌスの槍ですかね」

「そういうことになるかしら」

沙耶香は薔薇により殺され、十字架にかけられている少女を見て言った。

「そして。これは私達への挑戦ね」

「はい」

その言葉に速水も頷く。

「五人の生贄。最初の一人」

「紅い薔薇により殺された」

「後四人。生贄にするつもりね」

「それは。許しますか？」

「まさか」

沙耶香はそれはすぐに否定した。

「そんなことを許すのは。プライドが許さないわよね」

「ごもつとも」

「私はね、仕事は果たす主義なのよ」

「それは私も同じことです」

「わかっているわ。それじゃあ」

「まずは犯人を」

「探すことにするわ」

教会の紅い薔薇のことはすぐに館の主人にも伝わった。そしてシスターの遺体は十字架から下ろされ、丁寧に葬られることになった。それを見る神父の悲しみは極めて深いものであった。

「あの」

だがこれも捜査の為である。二人はその落胆している神父に声をかけた。二人であった。

警察は主の力のせいか公には呼ばれなかった。内密に呼ばれた者達も陰に隠れて遺体を下ろし、解剖に向かうだけであった。彼等は今回の捜査には携わっていなかった。あくまで沙耶香と速水の仕事であったのだ。

二人は神父に問うてきたのだ。犠牲者であるシスターのことを。

速水のファイルでおおよそのことは知っていたがそれでも直接情報を聞き出したかったのである。

「お話を御聞きしたいのですが」

「貴方達は」

初老の神父は二人に顔を向けた。二人はにこやかとはいかないが一応は笑みを作った。口の両端を微かに形を変えて笑ったのである。「はい、こちらの主の方に呼ばれまして」

沙耶香は昨日ここに来たことは隠した。身分を明かすと何かとやりづらくなると思ったからだ。

「探偵さん達ですか？」

「ええ、まあ」

「そんなところですよ」

「左様ですか」

あまり成功したとは言えない演技だが神父はそれに頷いた。そして二人を礼拝堂の奥の控え室に入れ三人で話をはじめたのであった。

「彼女は、よいシスターでした」

席に着くとまずこう言った。

「よいシスターですか」

「はい。真面目で信心深く。期待していたのですが」

「それがああしたことに」

「まことに。悲しいことです」

神父は肩を落とした。この上ない落胆であるのは二人にもわかった。

「犯人は。誰なのでしょう。せめて罪を償ってもらいたいものです」

「それはこれからですね」

「犯人は我々が必ず探し出します。ですから御安心を」

「お願いします」

「わかりました」

神父との話はすぐに終わった。とりあえず情報は得たがそれはシスターに関する差し障りのないものでしかなかった。そして別に探っていたことも手懸りとはならなかった。

「あの神父さん、どう思いかしら」

沙耶香は教会を出て暫くしてから速水に声をかけてきた。

「彼は。何も感じませんね」

これが速水の返答であった。沙耶香も同じものを感じていた。

「邪悪なものも暗いものも。一切ありません」

「真面目な只の神父ってわけね」

「はい、それは貴女にもおわかりだと思いますが」

「そうね。それは感じるわ」

沙耶香もそれは感じていた。そのうえで述べた。

「あの人は関係ないわね」

「そうとしか感じられませんか。犯人は別にいます」

「じゃあ誰が」

「残念なことに。それはまだわかりませんね」

速水はそう言っただけで残念そうに首を横に振った。

「一体誰なのか。しかし誰であろうとも」

「相手は。相当悪趣味なようね」

「薔薇に十字架ですか」

「それに棘。演出家のつもりかしら」

「そうした死を。芸術だと考えている輩なのかも知れません」

「ぞっとするわね。どうもそうしたのは会う機会が多いけれど」

「それは私ですよ」

二人は庭を進みながら話していた。その左右には薔薇が咲き誇り、香りが辺りを支配していた。二人はその中を進んでいたのである。

「何故かね。これも縁でしょうか」

「厄介な縁ね」

「私としては貴女との縁があればそれでいいのですが」

「それはないかもね」

「おやおや、つれないことです」

「諦めたら？私は一人の女の子にも殿方にも満足しないわよ」

「限られた魅力の持ち主にだけ許される御言葉ですね」

だが速水はそう言われても相変わらずであった。

「だからこそ。私も」

「好きにすればいいわ。そうしたらそのうち私の気も変わるかも」

「それをお待ちしていますよ」

「期待しないでね。さて、手懸かりは何もなかったけれど」

「ないなら探すまでです」

「そうね。それじゃあ私も」

沙耶香の影が動いた。そのまま何処かへと消えていく。

「はじめるわ。貴方もね」

「はい」

速水はこくりと頷いた。手を掲げるとそこにタロットのカードが姿を現わす。それを投げると一斉に何処かへと飛んで行った。カード達はそのまま姿を消した。

第十一章

「これでまずは」

「よしね。さて、何かわかるかしら」

「わかればよし。わからなければ」

「また。新たな術を使うことにするわ」

「私も。そうさせてもらいますか」

二人はこうして捜査を開始した。影とカードが洋館と庭を回り、そして捜す。だが暫く経つても手懸かりは手に入らなかった。昼食を終えた二人の下に影とカードが戻って来た時も何も手懸かりは得られてはいなかったのであった。

「何も。なしね」

「どのカードも何も見ていません」

二人は影とカードからそれを察して述べた。二人は今一階のロビーにいた。そこでチェスを嗜んでいたのであった。沙耶香が黒、速水が白であった。勝負は速水が押していた。

「どれ一つとして」

「じゃあ影を増やしても同じね」

「おそろくは。意味はないかと」

「そうね、結局は同じね」

「おそろく犯人はこの屋敷にいますが」

「昨日見たファイルの中にいるのね」

「そうだとは思いますが。しかしそれですと」

「私達にその気配すら探らせない。中々のやり手ね」

「そしてあの方にも」

「ええ。あの方にも感じさせないのはね。中々どころじゃないわ」

この洋館の主人である。彼は二人ですら一目置く程の人物である。その彼ですら気配を察しないというのはやはり尋常なものではないとしか言えなかった。

「練り直すかしら、根本から」

沙耶香はビシヨップを動かしてから呟いた。それを動かしても劣勢は変わらなかったが。

「それで何か変わりますかね」

「少なくともこのチェスよりかはどうにかなるでしょうね」

「もうすぐチェックメイトですね」

「残念なことね」

「何、チェスは元々得意でして」

「貴方にはこれで勝ったことはなかったわね」

「ボードを使ったもので負けた記憶はありませんね」

その右目を細めて述べた。

「誰に対しても。無論貴女に対しても」

そのボードの上に置かれている黒と白のボードと駒を見て言う。

既に沙耶香の劣勢は明らかでありもう少しで敗れそうである。だが沙耶香はそれを遊びだと割り切っていた。真剣にはなっていない。

「それじゃあその頭の回転を今回は見せてあげるわ」

「いえ、私は頭よりずっといいものを持っています」

「カードかしら」

「はい、カードは人の気付かないものまで映し出します。そう、何もかも」

「魔術と同じ様にね」

「そうですね、ですから今回もまた」

「貴女の占術が勝つか私の魔術が勝つか」

沙耶香は唇の両端を微かに上げて笑った。笑いながらまた駒を動かす。

「どちらかしらね」

「それもまた決まっています」

速水は同じ様に笑い返した。そのうえで彼もまた駒を動かす。

「チェックメイト」

そしてそのうえで言った。

「このチェスと同じ結果です」

「あら、チェスはチェスでしかないわ」

それでも沙耶香は負けてはいなかった。チェスで負けはしても。

「魔術は違うわよ」

「では私の占術も」

「お互い。見せてもらうことになりそうね」

「ええ」

「それを。楽しみにしてるわ」

二人は席を立つとロビーを後にした。それから新たな術で捜査にあたる。結局この日はこれといった情報は手に入らなかった。手に入ったのはシスターの胸を貫いていた薔薇のことだけであった。

「あの薔薇はこの屋敷の薔薇でしたね」

「赤薔薇ね」

「はい、紛れもなくあれでした」

二人は今度は速水の部屋で向かい合ってテーブルに座っていた。そこで紅いティーを飲んでいる。中は沙耶香の部屋と変わりがない。同じ配色に同じアクセサリーの部屋であった。

「庭の赤薔薇。それから察するに犯人は」

「どう考えても。この屋敷の人間ね」

「ええ。そういえばあの方は今日はおられませんでしたね」

「何でも何か用事があったそうよ」

「そうだったのですか」

「野島さんもね、一緒に」

「ではあの二人は犯人ではない」

「疑ってるの？二人を」

「申し上げた筈です、犯人はこの館の者しか有り得ないと」
速水の右目が強く光った。

「それからしますと当然だと思いますが」

「厳しいわね」

沙耶香はそれを聞いてまた口の端を微かに歪めた。

「まるで探偵みたいね」

「私は探偵には向いていないと自分では思っていますが」
「そうかしら」

「ただ、少なくとも御二人である可能性は消えました」

「それにあの神父さんも覗いてね」

「はい」

「それだと妖しいのは」

「まずこの家の従医さんに看護婦さんが二人」

「そしてメイドの女の子が七人」

「あの方の御付の女性に」

「それだけだったかしら」

「シエフが三人おられましたね」

「それと庭師ね」

「ええ、それだけです」

「神父さんを入れて十六人」

「これだけです」

「こうして考えると女の人が多いわね」

沙耶香はあらためて言った。

「十六人のうち十人なんて」

「いえ、十一人ですよ」

だが速水はそれを訂正してきた。

「そうだったの？」

「シエフの方です。御一人は女性ですよ」

「あら」

それは言われてようやく気付いた。ファイルの写真からはとてもそんなことは感じられなかったのだ。

「そうだったの」

「ええ。シエフといいましてもソムリエですが」

「ソムリエ」

ワイン担当である。どの料理にどのワインが合うか、それをチェ

ツクし、客に伝えるのが仕事である。西洋の料理には欠かせない存在である。

「女性のソムリエなのですよ」

「そうだったの」

「資料をもう一度御覧になられますか？」

「ええ。誰だったかしら」

「こちらです」

速水はすぐに資料を出してきた。隠れている左半分の顔を左手に向けるとそこにファイルが姿を現わしたのである。

「どうぞ」

そのうえでそのファイルを沙耶香に手渡した。彼女はそのファイルを受け取った後で速水に対して言った。

「どうやらまた力が強まったようね」

「そうですね。隠してはいますが」

「隠していてもそれだけ出せるというのは凄いは」

「そうですね。最近ではこの力に恐れさえ抱いておりますが」

速水は少し自嘲気味に笑ってこう述べた。

「何処まで強くなるのか。そしてそれをコントロールしきれなのかね」

「それは安心していいわ」

「何故に」

「貴方ならね。どんな力でもコントロールしきれるわ」

「買い被りだと思えますが」

「そうかしら、私はそうは思わないわ」

沙耶香は速水を見て笑っていた。うつすらとした笑みであったが確かに笑っていた。その笑みには普段の誘う様なものも艶やかなものもなかった。彼女にとってはあまりにも意外な、ごく普通の穏やかな笑みであった。

第十二章

「少なくとも貴方は自分の感情をコントロール出来るわよね」

「ええ」

速水はそれに頷いた。

「それには自信があります」

「だったら安心よ。こうした力というのは感情とシンクロしているから」

「それはわかっていますが」

「だからね。貴方なら」

沙耶香は言う。

「どんな力になっても大丈夫よ」

「その言葉信じさせてもらいますか」

速水はそれを聞いてこう述べた。自嘲気味だった笑みは穏やかで何かを信じるようなものになっていた。

「貴女の言葉ですしね」

「恋する女には、てことかしら」

「そんなところですよ」

そしてそれを否定はしなかった。

「ではこの力。これからも」

「ええ」

「使わせて頂きましょう。それですね」

彼はファイルに話を戻してきた。

「そちらの女性です」

「彼女ね」

「はい、おわかりだと思いますが」

「日本人ではないわね」

沙耶香にもそれはすぐにわかった。彫の深い顔立ちに白い肌、髪は炎の様に赤くその目は水晶の様に透き通った湖の色である。明らか

かに日本人のものではなかった。

「ワインということは。フランス人かしら」
「そうですね」

速水はその言葉に頷いた。

「御名前はエレナ・ダレンジエール」

「フランスの名ね」

「フランスでは有名なソムリエらしくて。あの方に特別に招かれたようです」

「それでこの屋敷に」

「はい。私達のワインもこの方が選ばれたそうです」

「成程。あのワインも」

「はい」

「彼女が選んだのね、見事だったわ」

「見事というのは。ソムリエとしてだけですか？それとも」

「その先も私に言わせる気がしら」

「おやおや」

沙耶香のその言葉に肩をすくめてみせた。

「ではまた」

「そうね。面白そうだわね」

また沙耶香の方もそれを隠そうとはしなかった。

「美味しいワインと共だね」

「詳しい身元調査ですか」

「どうしようかしら。貴方はこれからどうするの？」

「私ですか？今は何もしませんよ」

速水はそう沙耶香に述べた。

「今はね。とりあえず事件の調査も一段落しましたし」

「そうなの」

「ええ。また明日です」

「寝るだけ、というわけね」

「一人寂しくね。もてない男というものは辛いものです」

「言ってくれるわね」

「何、聞き流して下さって結構ですよ」

「それじゃあ」

「御自身の部屋ですか？それとも」

「さてね」

沙耶香はその返事はあえてぼかしてきた。

「どうしようかしら」

「またそんなことを」

だが速水にはおおよそのことは予想がついていた。

「まあいいです。私はそちらには何も言うつもりはありませんから」

「寛容なのね」

「貴女程の魅力の方なら。どんな人でも心を奪われます」

「そうかしら」

「私もそうなのですから。それでは」

「ええ。お休みなさい」

「お休みなさい。よい夜を」

最後に夜の挨拶を交わせて部屋を後にした。そして向かうのはワ
イン蔵であった。沙耶香は何故かそちらに向かったのである。

「やはりそこにいたのね」

「貴女は」

黒いズボンに同じ色のベスト、そしてカッターに蝶ネクタイを身
に着けた美女がそこにいた。ファイルにあった通りの顔をしていた。
彼女に間違いなかった。

第十三章

「この家の客人よ。話は聞いていると思うけれど」

「ええと、二人おられましたか」

「沙耶香よ」

彼女は名乗った。

「松本沙耶香。聞いているわね」

「貴女がそうでしたか」

「ええ」

そのうえで頷いた。

「この屋敷のソムリエは貴女ね」

「はい」

その美女、エレナ「ダレンジエールはその言葉に頷いた。かなり流暢な日本語であった。そちらもかなり勉強してきたのがわかった。

「如何でしたでしょうか、今までのワインは」

「申し分ないわ」

沙耶香はそれに答えた。

「流石と言うべきね。料理に実に合っているわ」

「この屋敷の料理は最高のものです」

エレナは述べた。

「フランスにあるどのレストランともひけはとりません」

「あら、そんなに」

「はい、それはおわかりだと思いますが」

「私にはそこまではわからなかったわ」

沙耶香は味には敏感だ。だがそれでもフランス人のようにああだこうだと言う性格ではないのである。フランス人はあまりにも極端だと沙耶香は考える。それは偏執狂の域に達していると。

「ワインはわかったけれどね」

「有り難うございます」

だがワインは違った。酒も愛する彼女にとってこれは譲れなかった。どちらかといえば彼女は料理より酒を愛する方だ。こちらはフランス人にも負けてはいない。

「このワインもまた。最高のものばかりです」
エレナは恭しい声で述べた。その整った目がワインと沙耶香を見る。

今二人の周りには無数のボトルが寝かされている。温度は適度に保たれ、少し薄暗い光が蔵の中を照らしていた。そしてその中で二人は話していた。

「ここまで揃えている場所は。フランスにも」

「最初は期待していなかったでしょう」

沙耶香はそう問うた。

「フランス程に料理もワインも揃えている場所はないと」

「はい」

エレナもそれは認めた。目を伏せて答える。

「その通りです」

「やはりね。フランス人らしいわね」

そしてそれを聞いてうつつすらと笑った。

「我々フランス人のことをよく御存知ですね」

「フランスにも行ったことあるから」

「左様で」

「ニースとかにね。行ったことがあるわ」

「ニースに」

南フランスの有名な避暑地である。欧州から上流階級の者達がやって来る場所である。欧州にはまだ貴族的なものが色濃く残っている。その為そうした場所にもかつて、若しくは今も貴族の者達がやって来るのである。

「パリにもね。堪能させてもらったわ」

「そうだったのですか。フランスのことも御存知なのですね」

「そうよ、料理もワインも文化も」

彼女は言った。

「そして女性もね。どれも素晴らしいわ」

「有り難うございます」

エレナはここでは気付かなかった。沙耶香の笑みが妖艶で何かを狙うものになっているのに。そしてそれが彼女に向けられているということに。彼女は気付いてはいなかった。

「フランス人はまず自分達のを第一と考えるわね」

「否定はしません」

これはあまりにも有名である。それにより欧州の周りの国はおろか世界から顰蹙を買うことも多い。それでもフランスはフランスなのである。

「日本にもこれ程のものがあるとは」

「思いも寄らなかつたと」

「はい。御言葉ですが所詮フランスではないと」

「そう思つたわね」

「ところが。これ程までとは」

エレナにとっては信じられないことであつたのだ。

「素材とシエフを揃え、そしてワインは」

「どれも。選りすぐりよね」

「そうです。私もここまで揃っているのは見たことがありません」

「それだけのものがある場所にはあるということよ」

「ええ」

「私もね。それはわかつたわ」

「そうなのですか」

「フランスでもね」

「そういえばフランスにも来られたのですね、パリやニースに」

「そうよ。どれも忘れられない思い出よ」

「フランスではどれが最もよかつたでしょうか」

ここでエレナはフランス人が期待している答えを待っていた。フランスそのものだと。沙耶香もそれはわかつていた。だが。彼女は

あえてそうは答えはしなかったのであった。

「女性よ」

「女性!?!」

「そうよ。全ての中で。それが一番美味しかったわ」

「あの」

エレナにはその言葉の意味がよくわからなかった。

「松本さん…….…….でしたね」

「ええ」

「それは一体。どういう意味なのでしょう」

「わからないかしら」

「女性が最も美味しいとは。その」

「今からその言葉の意味を教えてあげるわ」

そう言った瞬間であった。沙耶香はエレナの前に姿を現わしていた。まるで影の様に現われた。

「!?!」

「それはね」

彼女は語る。

「こつこつことよ」

そしてエレナの唇を奪った。刹那の動きであった。

「なっ」

唇を奪われたエレナは咄嗟に沙耶香から離れた。口を手で守りながら言う。

「一体何を」

「知らないのかしら、接吻よ」

沙耶香は目と唇だけで笑いながらエレナに言葉を返した。

「それは知っています」

「じゃあわかるわよね」

沙耶香は自身を守ろうとするエレナを悪魔的な、それでいて甘さを秘めた誘惑の笑みで見ながら言った。

「私が何故ここに来たのか」

「そんな、私達は」

「女同士、と言いたいのかしら」

「それ以外に何が」

「おかしなこと」

そのうえで彼女は笑った。

「女同士だからいけないというの？」

「神の教えは」

「神、ね」

エレナはフランス人だ。ならば信じる神はわかる。だが沙耶香はその神の名を聞いて一笑に伏したのであった。

第十四章

沙耶香には神なぞ知ったことではない。魔をその身体に纏う者にとつては神という存在程嘲笑すべきものはない。その神が何をしてきたのか。神の名において何が行われてきたのか。それを全て知っている彼女にとつてはその名を出されても晒うことはあっても怖れることはなかった。

「では。若し神が赦せば貴女はここで私に抱かれるのかしら」

「神がそんなことを御赦しになられる筈がありません」

エレナはそれを頭から否定した。どうやら結構信仰心は深いようである。

「この様な大罪を。どうして」

「大罪だからよ」

沙耶香は必死で否定しようとするエレナを見ていた。その黒い目が薄暗い部屋の中で妖しく輝いていた。まるで闇夜の中の黒水晶の様に。

「人は罪を犯すもの」

そして言う。

「罪を犯す存在だからこそ赦されるのよ」

「ですが」

「なら。教会の懺悔室は何故あるのかしら」

沙耶香の姿は何時の間にかエレナの前から消えていた。そして後ろから声が聞こえてきた。

「えっ」

「聞いているのよ。何故懺悔する為の部屋があるのかしら」

沙耶香は後ろにいた。後ろからエレナに囁いていた。顔を後ろに向け見上げる彼女を見下ろして。もうすぐ側にまで来ていた。彼女の白い整った顔を覗き込みながら尋ねる。

「それは人が罪を犯してしまった時の為に」

「そうよね」

沙耶香はその答えに頷いた。

「その通りよ。それじゃあ」

その答えを聞いたうえで言う。

「わかっているわね」

言いながらその手をエレナのベストの中に入れてきた。

「罪を。犯しましょう」

「罪を」

「そう、清められない罪なぞ存在しないわ」

「ではこの罪も」

「ええ、清められるのよ。だから」

「犯しても」

「そのまま。貴女は清められるのよ」

エレナを抱いていた。黒い天使が美女を捉えていた。そして。二人は甘美な魔界へと旅立つのであった。

エレナに甘美な背徳の罪を犯させ、それを共有した沙耶香はその後ですぐに服を着た。側ではエレナが半ば呆然としながらも服を着ていた。

「どうかしら、この罪は」

「これが罪……」

「そう、神が赦さないというのならね」

「私は。罪を犯した」

「けれどそれは赦される罪」

「じゃあ」

「そうよ。神に祈りなさい。そして」

沙耶香はここでまた妖艶に笑った。

「また私と」

「この甘美な罪を」

「共に味わいましょう。いいわね」

「はい」

その言葉にこくりと頷いた。それから沙耶香に声をかける。

「ところで今日のワインは」

「シャトー＝ペトリュスがいいわ」

沙耶香は答えた。

「シャトー＝ペトリュスですか」

エレナはそのワインをよく知っていた。赤のフルボディのワインだ。ボルドー産であり少産ということもあり希少価値のワインとされている。

「あるかしら」

「はい、年代ものが一本」

「じゃあそれを頂くわ」

「わかりました。それじゃあ」

「夜寝る前にはね。女の子とワインが欠かせないわね」

「はあ」

「そして薔薇が。今度はどの薔薇かしら」

「薔薇!？」

「何でもないわ」

これはエレナとは関係のない話であった。すぐに打ち消した。

「けれど。貴女もまた大輪の薔薇であり、そして美酒ね」

「私が」

「その味、堪能させてもらったわ。よかったらまた」

彼女に目を向けて言う。

「また。罪を犯しましょう」

「はい……」

それは罪を刻まれた者の返事ではなかった。罪を共有する者の返事であった。今彼女はその身体も心も沙耶香のものとなったのであった。そして沙耶香もそれははつきりとわかっていた。そのことに満足を感じながらワイン蔵を後にした。シャトー＝ペトリュスと共に。

第十五章

その後風呂場に入り、シャワーを飲み干して寝た。目覚めた時は朝だった。目覚めた沙耶香が聞いた話は第二の犠牲者の報であった。「二人目ね」

その話を速水から聞いた沙耶香は微かに目を動かした。二人は今現場に向かっていた。

「被害者は誰かしら」

「御付の方です」

「あの方のね」

「はい。御付といつてもよく言われるような人ではなく」

「ここで若い愛人をさしていた。」

「単なる使用人に過ぎなかったそうです」

「そうなの。面白くないわね」

それは沙耶香の望んだ答えではなかった。彼女はそうしたよく言われるような話を期待していたのだ。

「そんなことじゃ」

「それと捜査は別の筈ですが」

速水が不平を口にする彼女を嗜めた。

「話にはね、何でも色気が必要なのよ」

だがそれではいそうですかと聞き入れる沙耶香ではなかった。そう言い返してきた。

「まああの方は。昔からそんなことはなかったようだけれど」

「貴女と違いますからね」

「また言ってくれるわね」

「昨夜もまた遊ばれたのでしょうか？」

「わかるの？」

「ええ。香水の香りが二つしますので」

「おかしいわね。お風呂は入ったのに」

「香水というのは。また特別ですから」
速水は述べた。

「身を清めても残るものなのですよ」
「難儀なものね、また」

「貴女の香りはまた。特徴がありますから」

「私が纏う香水は一つだけよ」

沙耶香は笑ってこう述べる。

「それは？」

「シャネルだけなの。知っていたかしら」

「それはまた初耳ですね」

「香水のことも知らないと女の子にはもてないわよ」

「オーデコロンにはそれなりに詳しいつもりですが」

「それだけではね。駄目よ」

「ではシャネルを勉強させてもらうとしましょう」

速水は笑ってそう言葉を返した。

「貴女がつけているなら」

香水の話をしているうちに事件のあった部屋に着いた。そこはその女性の個室であった。見れば今沙耶香達がいる部屋と全く同じ造りの部屋だった。そのベッドの中で全裸になって死んでいた。

「全裸？」

「被害者は全裸で寝る人だったそうです」

「そうなの」

速水の話聞いて納得した。

「私も時々そうするから。わかるわ」

「身に纏うのはシャネルだけ、ですか」

「そういう時もあるわね」

話が少し先に戻っていた。だが今は二人の顔は決して軽いものはなかった。

「けれど。この人は違ったみたいね」

「ええ」

「グラスに。これは」

「白ワインです」

部屋に控えていたメイドの一人が答えた。沙耶香が抱いたメイドとは違う女の子であった。その娘と歳は大体同じのようであるが背がそれよりも低かったのだ。

「私が昨夜運んだのですが」

「貴女が？」

「はい」

沙耶香の言葉にこくりと頷いた。

「昨夜は私が当番でしたので。そして朝起こしに来たら」

「死んでいたのです」

「そうです」

「じゃあ貴女が第一発見者になるわね」

沙耶香は話を聞きながら彼女に問うてきた。

「そして死因は」

「遺体に外傷はありませんね」

速水はその侍女の死体を見て言った。美しい顔と身体が蠟の様に蒼白になってベッドの中に横たわっている。宙を見た目は何も語らない。口から一条の血がたつたっているだけである。

第十六章

「そして。血」

「外傷がないとすれば」

「沙耶香も遺体に目をやった。」

「毒、かしら」

「おそらくはそうですね」

「速水もそれに頷く。答えは自然と導かれていた。」

「これね」

「ええ」

「二人は白ワインに目をやった。」

「これで殺されたと」

「見るのがいいですね」

「あの」

「メイドはそんな二人の言葉を聞いて恐る恐る声をかけてきた。」

「私が。疑われてるんでしょうか」

「貴女が？」

「沙耶香はふとそのメイドを見た。その瞬間その黒い目が赤く変わった。その赤い目で彼女はこのメイドの心の中を覗いてみた。これもまた黒魔術の一つであった。」

「いえ、違うわ」

「術はすんなりと通った。彼女にはそうした靈感等はないせいであ
手く心を読むことができた。彼女は殺意などは持ってはいなかった。
ただ自分が犯人にされるのではという怯えがあったただけであった。
彼女が犯人ではないことはすぐにわかった。」

「貴女ではないわね」

「はい」

「その言葉に必死に頷く。これだけでよくわかった。」

「私はそんなことは」

「わかってるわ」

沙耶香はそれに応えて頷く。

「貴女ではないのはね」

「わかってくれますか？」

「ええ。ただ」

沙耶香は別のものを見ていた。

「これには謎があるわね」

ワインを見据えていた。白ワインを。見ればその中に何か浮か
んでいた。

「！？あれは」

「花びらですね」

速水もそれに気付いた。

「薄いのでよくわかりませんでした」

「ええ。何かしら」

二人はテーブルに近づく。そして花びらを見た。

「これは」

それは薔薇の花びらであった。黄色の薔薇の。その色の為ワイン
の中で目立たなかったのだ。白ワインの色の中に隠れて。だが今二
人はその花びらを確かに見ていた。

赤い薔薇の次は黄色の薔薇であった。そしてまたしても犠牲者が
現われた。死因は二人によってすぐに調べられた。やはり毒殺であ
った。何処に毒があったのかも二人は調べていた。

「やはり思った通りでした」

二人は調査が終わった後で沙耶香の部屋に集まっていた。そこで
速水が彼女に語っていた。

「毒はあの花びらに含まれていました」

「やっぱりね」

沙耶香はそれを聞いて頷く。

「遅効性の猛毒でした」

「遅効性」

「はい。僅かでも口に含めばそこからゆっくりと死に至る。眠るよ
うにね」

「そしてああいうふうに死ぬのね」

「そうです。痛みも苦しみも感じずに」

「わかったわ。だからああして」

「そうです。死亡時間は」

「死後二時間っていったところだったわ。夜の間には死んだのね」

「そうですか。では間違いないですね」

「ええ。薔薇の毒でね」

二人はここまでわかった。

「肝心なところはわからないわね」

「カードにも反応はなしです」

「何か感じるかしら」

「いえ」

速水は沙耶香の言葉に首を横に振った。振らざるを得なかった。

第十七章

「何も」

「そうよね、それは私もよ」

「見事なまでに何も感じませんね」

「そうね、誰なのか」

「只、薔薇を好むのはわかります」

「そして死体には凝ってるわね」

「そうですね、黄色い薔薇の時は特に意識はしていませんが」

「出来るだけ美しくなるように仕向けているわね、犯人から見ても」

「それはわかりますね」

「ただ、殺し方があまりにも違うわね」

「それに薔薇の選び方も」

二人にはわからないことばかりであった。

「赤薔薇かと思えば次は黄色の薔薇」

「何か意味があるのかしら」

「それだけでもわかればいいのですが」

「薔薇にも種類は色々あるけれど」

沙耶香は考えながら述べた。

「それでも。何も繋がりはないようね」

「ですね」

「余計にわからなくなってくるわ。何が何なのか」

「刺し殺したかと思えば次は毒殺」

「そして使った薔薇も違う」

「ところでこの薔薇はワインに入っていましたね」

「ええ」

「エレナさんはどうでしたか？」

「彼女は白よ」

沙耶香は答えた。

「アリバイは私がちゃんと知っているわ」

「どういうことですか？」

「あの薔薇がワインに入れられたと思われる時刻ね」

二人はそうしたことまで調べていた。その魔術や占術を使った調査は警察の科学的な調査をも凌ぐものがあった。伊達にこの仕事をしているわけではなかった。

「私は彼女と一緒にいたから」

「そういうことですか」

「ええ、ワイン蔵でね」

そう言うてにやりと口の両端で笑った。何かを食べて満足したよ
うな笑みであった。

「だから。彼女は無実よ」

「わかりました。では彼女以外ですね」

「ええ。段々と限られてくるけれど」

「メイドさんの中も一人は外れましたし」

「神父さんとエレナさんもね」

「じゃあお医者さんと二人の看護婦さん」

「メイドの子のうちの六人と」

「そしてコックの方が御二人。それだけですな」

「それを考えると犯人は限られるけれど」

「しかし。何故か見つかりませんね」

「私達がいるのにね」

二人の術は絶大なものがある。それはお互いよくわかっていた。

沙耶香も速水も絶大な力を持っている。その二人をして。犯人は姿
を掴ませていないのであった。

「こうして閉じられた空間での連続殺人は」

「犯人は状況を楽しんでいます」

「次に亡くなるのは誰か。自分かも知れない」

「残された人々が怯えるのを楽しみながら」

「次の殺人を考えるのよ。ゲームみたいだね」

「はい。それで」

「次に何をしてくるのか考えるべきかしら」

「いえ、それは意味がないでしょう」

だが速水はそれには首を横に振らなかった。

「駄目かしら」

「そもそも相手のパターンすらわかっていませんし」

「そうね」

「地道に調べるしかありませんね。網を張って」

そう言つと懐からカードを取り出した。

「今までは大アルカナだけでしたが今回はこれも使いましょう」

「小アルカナね」

「はい、これを」

速水は宙に投げた。投げられたカードはすぐに宙を舞いあちこちに消えていった。

「彼等を目付けにしましょう」

「それじゃあ私も」

その身体を複数に分かれさせた。七人の沙耶香がそこに姿を現わした。

そのうちの六人がすつと床の中に足から入って行った。そのまま床の中に消えていく。

「これでいいわ」

「分け身ですか」

「そうよ、何かを探るにはこれが一番」

「上手く尻尾を掴めればいいですがね」

「そうね。けれどこれで見つからないなら」

「その時はその時でまた考えましょう」

「ええ」

二人はまたそれぞれの術を使って捜査を開始した。だが事件はそんな二人を嘲笑うかの様にまた起こってしまった。今度は風呂場の一つで起こった。

この屋敷は洋館ながら風呂場がある。シャワーではない。それも男と女で二つずつだ。事件はそのうちの女湯の一つで起こったのであった。

「今度はここなんてね」

話を聞いた沙耶香と速水はそこで新たな犠牲者を見た。今度は看護婦の一人が犠牲者であった。時刻は夕刻、もう風呂が開く時間であった。そこで早速起こったのであった。

「またしても、ね」

「ええ」

速水は犠牲者を見ながら沙耶香の言葉に応えた。その言葉には沙耶香と同じ苦い感情が聞けた。

第十八章

「第三の犠牲者です」

「それにしても今回も凝ってくれているわね」

「そうですね。今度もまた薔薇です」

「それも白薔薇とは。趣向を凝らしているわね」

二人は今浴槽の側に立っていた。その中では若い女が全裸で浮かんでいた。長い髪もその水の中に漂わせながら。その白い身体の周りには白薔薇の花びらが浮かんでいる。そして彼女の身体に纏わり付いていた。それが薄気味の悪い美の世界を映し出していたのであった。透明な水の中に白い美女が浮かび、白薔薇の花弁が飾る。美しくも禍々しい、不思議な光景であった。

今度の殺人もまた毒殺であった。しかし黄色い薔薇の時とは趣きが違っていた。

「今度は即効性の猛毒でしたね」

「そうだったの」

二人はまた沙耶香の部屋で話をしていた。テーブルの上でワインを飲みながら話をしている。既に夕食は済んでいた。そして酒を嗜んでいたのであった。酒は口ゼだった。二人はその薔薇の色の酒を飲みながら薔薇の毒について話をしていたのであった。

「触れたらそれだけで全身に毒が回り死ぬものです」

「それで命を奪ったのね」

「はい」

速水はそれに答えた。

「すぐに。どうやって薔薇を送り込んだのかはまだわかりませんが」
「案外ローズが入っていて喜んで入ったのかもね」

「薔薇のお風呂ですか」

「そうよ、かなり豪華なものよね」

「まあ確かに」

優美でもある。それを考えると女性ならば、とも思える。

「けれどそれが仇になったわね」

「美しき薔薇によって命を奪われる」

「これで三人目」

「赤、黄、白」

沙耶香はそれまでに使われた薔薇の色を呟いた。

「何か。引つ掛かるわね」

「薔薇の色がですか？」

「ええ。何かね」

沙耶香は顎に手を置いて考えはじめていた。

「何かあるんじゃないかしら」

「そうですね」

「まだ実証はないけれど」

そこまではまだわからなかった。だが確かに何かを感じていた。

「薔薇にはそぐわない何か」

「薔薇にはそぐわない」

「この一連の事件は間違いなく繋がっているわ」

「はい」

これは速水にも予想がついた。

「けれど。それがどう繋がっているのかはわからないわ」

「どうなっていますかね」

「それは」

沙耶香にもそれはわからなかった。

「けれど。それがわかった時に何かがわかる気がするわ。手紙にあ

る通り」

「別の何か」

「恐ろしいことも知れないわ。覚悟が必要かもね」

「わかりました。では覚悟を」

「ええ」

二人はまずはその薔薇を回収し捜査に入った。捜査結果はやはり

はつきりしていた。速水の言う通りこれは薔薇の花弁に仕込んだ即効性の猛毒であり、これで命を奪っていた。これはわかった。

「水の中に浸して、ね」

「はい」

もう夜になっている。二人はまたあのロゼを飲んでいて。エレナに頼んで何本も開けていた。チーズやソーセージと一緒に飲んでいった。

「やはりそれでした」

「水の中に浮かぶ美女の屍で」

「薔薇に見送られて冥府へ向かう」

「何か文学的な表現だけれど」

「何処か趣味が悪い。次第に犯人の嗜好がはつきりしてきましたわね」

「少なくとも綺麗な女の人が好きね」

「そちらですか」

「ええ。私にはわかるわ」

沙耶香はそれに心えてこう述べた。そしてグラスの中のロゼを飲み干す。飲み干したグラスに自然に動いたボトルがワインを注ぎ込む。沙耶香の魔法であった。

「三人の犠牲者はどれも綺麗だったわ」

「確かに」

それは速水もわかっていた。彼はチーズを一口口に含んだ後でそれに返した。

「素晴らしい美貌の持ち主ばかりでした」

「そうよね。勿体無い位の」

「どの方も好みであられたようですね」

「それは否定しないわ」

自身の好みを隠すような沙耶香ではなかった。

「だからこそ残念なのよ」

「やはり」

「三人。これで三人よ」

「ですがこれで終わりではないでしょうね」

「そうね。手紙にあったのは五人」

沙耶香は述べた。

第十九章

「後二人。そして」

「残された薔薇は二つ」

「青と黒ね」

「青と黒」

その二つの色を聞いた速水の右目がピクリと動いた。

「まさか」

「何かに気付いたのね」

「はい、青と黒ですね」

「ええ」

「そして今までに使われた薔薇は」

「赤と白と黄」

「やはり」

そこまで聞いて速水は遂に気付いた。

「謎が一つ解けました」

「それは何かしら」

「この薔薇の色ですよ。何だと思われませんか？」

「赤に黄に白、そして青と黒よね」

「そうです。錬金術でも加わるものです」

「待って、錬金術よね」

魔術も占術も錬金術と関わりが深い。タロットカードの二十二枚のカードはそれぞれ錬金術の奥義を隠しているとさえ言われている程である。魔術は錬金術と表裏一体でもある。両者はそれぞれ錬金術と密接な関係があるのだ。そしてその錬金術はヨーロッパだけに留まらないのだ。錬金術のはじまりはエジプトにあるとされる。またアラビアでも発達した歴史がある。当時のキリスト教に比べて遙かに寛容であったイスラムは錬金術も奨励していたのである。それによってアラビアの科学技術はかなりの発展を遂げたのである。

そしてこれはユーラシアの西部だけではなかったのだ。
「錬金術はヨーロッパやアラビアだけではありません」
「ええ」

それは沙耶香もわかっていた。伊達に魔術師をやっているわけではない。

「そしてそのルーツの一つには」
「中国ね」

そのうえでこう述べた。

「中国の様々な思想」
「神仙や」
「五行思想ね」

遂に沙耶香はそこに言及した。

「ですね。それと完全に合わさりますね」
「迂闊だったわ」

沙耶香は酒を前にして呟いた。その言葉と顔からは彼女の心境は読み取れないがおそらく苦渋を舐めているのであろう。

「薔薇に目を取られて」
「薔薇といえば西洋のイメージですからね」
「そうね、盲点だったわ」
「ですが」

それがわかれば話かなり繋がってくる。速水はそれを感じていた。

「これですと薔薇もまたどうして使われたのかわかりますよ」
「まずは赤ね」
「はい。赤は」
「火、ね」

沙耶香は答えた。五行思想において赤は火、そして南を司る。

「黄は土で中央です」
「そして白は金で西」
「朱雀と麒麟、そして白虎が出ましたか」

朱雀は火を、白虎は金を司る。そして麒麟、若しくは中蛇が中央を司るとされている。五行思想にはそれぞれの動物が配されているのである。

「後の二つは」

「水に木ね」

「何が来ると思いますか？」

「五行思想よね」

「はい」

速水は答える。

「だとすると」

沙耶香には次の答えが待っていた。それはもう出ていた。

「黒ね」

「やはり」

「相生論になるわ」

「おわかりになりましたか」

「中国の術にはあまり詳しくはないけれどね。それはわかるわ」

「はい」

相生論は五行思想のリンクの一つである。火から土が、土から金。金から水が、水から木が、木から火が生じるという考えである。この論によって中国の王朝の変遷も語られる。水の秦から木の楚、そして火の漢である。司馬遷の史記にも書かれている。漢の高祖劉邦は赤龍の子とされたのはこのことに由来がある。尚漢の後の魏の曹操は土であり、その後の晋は金である。それぞれ属性があるとされている。この論理を続けていけば面白いことが一つ見える。清王朝は水の王朝であり、黒となる。その後の中華民国は木、即ち青だ。そして中華人民共和国は火、赤になる。蒋介石は藍衣隊というものを結成していた。所謂青シャツ隊である。中華人民共和国は言うまでもなく共産主義であるから赤だ。意図しているのであろうか、この二つは見事に一致するのである。

第二十章

もう一つ論がありこちらは相剋論だ。これは相生論と違い、互いを生むのではなく、互いを抑えるという論理だ。水が火を、火が金を、金が木を、木が土を、土が水を。そうした思想なのである。

五行ではどれもそれぞれ属性があり、どれが強いというものはない。それが最大の特徴である。今速水と沙耶香はそれを心の中で反芻していたのだ。

「そして次には青が」

「五色の薔薇と重なります」

「成程ね、これでわかったわ」

「犯人は。五行思想を下に殺人を行っていた」

「多分単に殺人をしているだけじゃないわね」

「はい」

「そこには魂胆があるわ。それもまた問題だけれど」

「それに関してはまだわかりませんね」

「そうね」

二人もそこまではわからなかった。

「ですが」

「何か得体の知れないことを考えている」

「予想がつかますか？」

速水はここで沙耶香に問うた。そしてワインを飲む。

「残念だけどつかないわ」

沙耶香は魔法で彼のグラスにワインを注ぎながら答えた。

「犯人が一体何をするのか」

「そこも探る必要がありますね」

「そうね。とりあえずは」

沙耶香は捜査に考えを戻した。

「明日は。聞いてみたい人がいるわ」

「誰ですか？それは」

「また明日ね。とりあえずは」

沙耶香もグラスを手に取った。

「飲みましょう。勝利を誓って」

「諦めたわけではないのですね」

「諦める？馬鹿を言っただけじゃないわ」

その言葉は一笑に伏した。

「私はね、徹底的に諦めの悪い女なのよ」

不敵な笑みを浮かべて言った。

「女の子も男の子もね、これはと思ったたら陥とすまでなのよ」

「頼もしいことで」

「何事もね、まずは執念よ」

そのうえで述べる。

「だから。今回もね」

「諦めないのですか」

「そうよ、犯人が誰であれね」

「では期待させてもらいましょう」

速水もそんな沙耶香が内心頼もしかった。だからこそ惚れているのだ。もっとも彼のアプローチも長い時間をかけているものであるがそれでも沙耶香は振り向かないのである。

「では今日は」

「ええ、乾杯ね」

グラスを差し出す。速水もそれに合わせる。

「もうかなり飲んでるけど」

「それでもまだ」

「飲みましょう。二人で」

「はい」

二人は飲み続けた。そして速水は部屋に戻り沙耶香も服を脱ぎベツドに入った。そのまま朝を迎えた。朝を迎えると扉をノックする音が聞こえてきた。

「誰かしら」

「朝食をお持ちしました」

少女の声であった。それに身体を起こさずは魔術で服を着る。
「いいわ」

そのうえで部屋に入るように言った。すると可愛らしい、小柄な少女がワゴンを前にして部屋にやって来た。

「おはようございます」

「今日の当番は貴女なのね」

「はい、宜しくお願ひします」

沙耶香に挨拶を述べる。

「ええと。まずは」

「朝食を頼むわ」

「はい、それからボトルとグラスをお下げて」

「お願いするわね。それにしても昨日はかなり飲んだわね」

「そうみたいですわね」

くすりと笑った沙耶香にそう返した。

「私はまだお酒は知らないですけど」

「まだなの」

「高校を卒業したばかりなので」

「それはよくないわ。早くお酒の味を知らないとはあ」

「はあ」

「本当の意味で女になれないわよ。酒は女を磨くもの」

「そう言いながらテーブルに座る。」

「知ると知らないとは輝きが全然違うのよ」

「そうなんですか」

「ええ、そうよ」

その言葉に応える。

「酒は何もかも奇麗にするの」

「テーブルに肘をつけて述べる。」

「そして心を誘ってくれるわ。貴女が今は知らない世界にね」

「知らない世界ですか」

「だから飲みなさい」

それが結論であった。

「そして別の世界を知るのよ」

「別の世界」

「それが貴女を待ってるのよ」

「わかりました。それではまた機会を見て」

「飲んでみて。きっといいことがあるから」

「ええ。では」

今は手を出さなかった。そうした軽い話だけであった。館の中では相変わらず事件が胎動していても。沙耶香は今は軽い話を楽しんでいたのであった。

第二十一章

だが。深刻な事態に陥っている者達もいた。

「館には辿り着けぬか」

「残念ながら」

あの老人と野島であった。二人はあるホテルの一室で困惑した顔で互いを見合わせていた。豪華な白を基調とした部屋であった。スイートルームであるらしい。この老人には何故か似合う部屋であった。和服を着、ステッキを手に持っている。そして葉巻を手にしながら彼は野島と正対していたのであった。

「念も届きません」

「むづ」

老人はそれを聞いてまずは唸った。

「実はわしの念もじゃ」

「御前の念もですか」

「そうじゃ。どうやら強力な結界を張っておるらしい」

「結界を」

「その為じゃな。念も届かぬとは」

「ですが御前の念まで防ぐとは」

「何、わしの念は実は大したことはないのじゃ」

「御戯れを」

しかし野島はその言葉を信じない。

「御前の念ならば」

「あの二人程ではないという意味じゃ」

「二人といますと」

「言うまでもないと思うがのう」

老人の返事は素っ気無いものであった。

「二人と言えばすぐにわかるじゃろうが」

「では」

「左様、あの二人じゃ」

野島はその二人が誰と誰なのかわかった。老人はそれを表情から読み取ると満足そうに笑った。

「あの二人は天才じゃ」

「はあ」

「生まれついでなのな。魔術と占術の」

「そして力も」

「うむ。あれだけの力の持ち主はそうはおらぬ」

どうやら彼はあの二人に対して並々ならぬ信頼があるようであった。

「ただ、二人共どうにも困ったところがあるがな」

「松本様はとりわけ」

「家の娘達に手をつけておるだろうな」

「それは宜しいのですか？」

「何、女が女に手をつけて怒るのも何じゃ」

彼はそれは一笑に伏した。

「例えばじゃ」

そのうえで言った。

「御主の妻が女に寝取られたならばどうする？」

「女にですか？」

「そうじゃ。男ならば許さぬであろう」

「無論です」

野島はその言葉には迷いなく答えた。

「生かしてはおけません」

「そうじゃな。わしだってそうじゃ」

どうやらこの老人は歳に似合わずかなり血気盛んのようである。今時ここまで言う者はそうはいない。

「じゃが。女ならどうしてよいかわからぬであろう」

「確かに」

野島は少し首を捻ってそう返した。

「相手が男なら浮気になります。が女ですと」

「寝取られたわけではない」

「ええ」

「難しいじやろ。どうにも怒る気になれぬ」

「ですね。釈然としないものがあります」

「それと同じじや。家の者に彼女が手を出しても咎めるつもりはない」

「ですか」

「これが彼であつてもよいのじやがな。実は」

「速水さんはまた」

野島は釈然としない顔から普通の顔に戻った。そして述べた。

「他の女性には興味がありません」

「相変わらずじやな」

「はい、松本さんだけを見ております」

「無理じゃと思うがのう」

老人はそれを聞いて顔を少し上げて呟いた。

「高嶺の花とかは言わぬがあれは」

「この世にある花ではありません」

「そうじやな。言うならば魔界の花じや」

「はい」

野島はその言葉に頷いた。

「彼には。添ぐわぬと思うがのう」

「そうは考えていないよう」

「困ったことじや」

それを聞いてふう、と溜息を出した。

「顔も性格もいいとは思ふがのう」

「松本さんの様に破綻してありませんし」

「そうなのじや。勿体無いことじや」

「何はともあれ今は館には御二人がおられますが」

「最初はわしと御主を入れた四人であたるつもりじやった」

「はい」

野島はまた頷いた。

「ここから帰ってからの。じゃが読まれておったか」

「残念なことに」

「敵はどうやら。館の中におったようじゃな」

「私はおるか御前にも感じさせない者がいたとは」

「かなりの使い手なのは間違いないな」

「ええ。それもかなりの」

「誰じゃと思う？」

御前は八条の目を見て問うた。

「それによつては大きなことになるが」

「と言われましても」

だが彼にも今一つこれといった心当たりが思い浮かばなかった。

第二十二章

「メイド達かも知れませんが」

「それはないと思うが」

「流石に無理ですか」

「わし等はともかくあの二人ならすぐにわかるじゃろ」

「ですか。それでは」

「わしは一人臭いと見ておる者がある」

「それは一体」

野島はその言葉に目を光らせた。

「誰ですか？」

「死神じゃ」

「死神!？」

「左様、発想を少し変えてな。見てみるとよい」

「今館にいる者達をですか」

「うむ」

奇しくも速水が引いた十枚のカードのうちの九枚目と同じであった。それが意味するのは何か。実は速水も老人も互いのことには気付いていない。だが二人は同じものを指し示していた。奇妙なことに。

「若しやするとだ」

「あの中に」

「可能性は高いじゃろ」

「それはそうですが」

だが野島には今一つ釈然としないものがあつた。

「旦那様と私の目をかいくぐるなぞ」

「じゃから今わし等が館に近付けぬのではないのか？」

「それは」

「そういうことじゃ。それだけの者じゃったといつことじゃ」

「果たして御二人で大丈夫でしょうか」

「流石にあの二人が揃っては容易には勝てぬわ」

老人は落ち着いた顔で述べた。

「御主である二人のどちらかの相手が務まるか？」

「滅相もございません」

彼の返事は早いものであった。

「私なぞではとても」

「わしでもじゃ。あの二人は言うならば天才じゃ」

「はい」

「天才には勝てぬわ。それも天才の中の天才にはな」

「それでは」

「ここは任せる」

彼は言い切った。

「犠牲は出てもな。よいな」

「畏まりました」

仕方の無いことであつたがそれに頷いた。そして二人は沙耶香と速水に全てを任せることにした。その任せられた二人は。館の中で今度は食堂で豪勢な夕食を摂っていた。

「いい魚を使っているわね」

沙耶香はカルパッチョを食べていた。彼女だけでなく速水も同じものを食べている。二人は細長い白いテーブル掛けのかかったテーブルで並んで食べていた。二人の他にはメイドが二人いるだけである。部屋は天井のシャングリラで白く照らされている。その下で食事を摂っていたのであった。

「こんな平目はそうはないわ」

それは平目のカルパッチョであつた。それと白ワインを嗜んでいた。丁度フルコースの魚料理の番であつたのだ。既にレタスとチコリ、それにトマトをオリーブオイルのドレッシングで味付けしたサラダとキャロットとオニオンのスープは食べ終えた。そして今はこのカルパッチョを食べているのであった。

「有り難うございます」

メイドの一人がそれに応えた。金髪の可愛らしい少女である。その髪と青い目、白い肌から彼女が日本人ではないことがわかる。

「シェフが喜びます」

「いつも思っけれど素材がまずいいわ」

沙耶香は述べた。

「築地でもこんな平目はそうそうないでしょうね」

「そんなに」

「ええ、わかるわ」

沙耶香は食べ終え、ワインで口直しをしてから答えた。既に白ワインのボトルはない。

「こう見えても私は料理には五月蠅いのよ」

「はあ」

「だからわかるわ。このシェフの目は確かね」

「それに素材だけではありませんね」

速水も食べ終えていた。そのうえで述べてきた。

「味付けも。実にいい」

「そうね」

沙耶香もそれに頷く。

「スパイスを生かしながらも素材の味を殺してはいないわ。そして平目とグレープフルーツ、レモンをよくミックスさせているわ」

「そんなにですか」

「これ程のものを出せるのは。フランスにもそうはないわね」

「それを言ったらフランス人が怒りますよ」

「構わないわ、本当のことだから」

沙耶香は速水に素っ気無く返した。

「それに私の前でそんなことを言える女の子はいないから」

「それは何故ですか？」

「誰もが文句を言うより前に私に釘付けになるからよ」
「うっすらと笑いながらの言葉であった。」

第二十三章

「私にね。口は美貌の前には塞がるもの」

これは沙耶香の持論の一つであった。

「ほう」

「それが女の子であつても美男子であつてもね。同じことよ」

「フランスは美人が多いですが」

「その美人も全て私のもの」

あえて豪語してきた。

「全ての美人はね。私のものなのよ」

「では美食も」

「そう、これもまた私にとつてはまたとない楽しみね」

「ではメインディッシュを運んで宜しいでしょうか」

「ええ、お願いするわ」

メイドの一人に答えた。

「それでは」

赤ワインとメインディッシュが運ばれてきた。それは子牛の肉を柔らかく煮たものであった。そこにデミグラスソースをかけている。如何にもフランスといった料理であった。

「エリゼ宮の話は知ってるかしら」

沙耶香はその料理を前にして速水とメイド達に対して言ってきた。

「料理とワインによってランク付けするのではしたね」

「ええ、そうよ」

速水の言葉は正解であった。そうそんな性格の悪さでは考え付くことすらできそうにもない慣わしであるとも思えるがフランスではこれが外交のしきたりであり礼儀であるそうなのだ。この様な無礼としか断定出来ない理由の何処に礼儀があるのかはわからないが。まあ言うだけならば盗作を平然と行う犯罪者ですら礼儀を口に出すことすら出来るし罵詈雑言を並べ立て、嘘を並べ立てる下劣漢も他

人の無礼を咎めることは出来る。それを他人が聞き入れるかどうかは全くの別問題であるが。フランスにとってはこれが外交辞令なのだろう。理解出来ないものではあるが。

「フランスではそうらしいわね」

「ここではそんなことは一切ありません」

金髪のメイドはきっぱりと云つてのけた。

「お客様には常に最高の料理とお酒をお出しする。これがこの家のしきたりです」

「そうなの」

「はい。ですからそんな無礼なことはしません、絶対に」

「そうね、それが正しいと思うわ」

沙耶香はそれを聞いてにこりと笑った。

「普通はそうよね」

「勿論です」

「けれどそれは日本人の考えなのよ」

「フランスでは違つと」

「そうよ。下手をすれば有色人種だからという理由で顔を向けてももらえない」

「アメリカでそれをやったらどんな店でも一発で弁護士が来ますね」

速水はそれを聞いて右目を顰めさせて述べた。

「よくそんなことが出来るものです」

「それがフランスなのよ」

沙耶香はあらためて述べた。

「ヨーロッパはまだそんなところがあるけれどね」

「差別が根強いのですか」

「差別というよりは区別ね」

「はあ」

「魔術を学ぶのだって苦労したんだから。かなりね」

「それは御聞きしていますよ」

速水は述べた。

「単身イギリスに渡られてから。色々あったそうで」

「魔術そのものはほとんど身に着けられたけれど」

「区別には参ったと」

「もっともそんなことをした相手は例外なく不幸になったのけれどね」

そう言つて不気味な笑みを浮かべた。まるで悪魔が魔界で笑うかの様に。

「私は差別と差別主義者は嫌いよ」

「それはこちらも承知しておりますよ」

「女の子は誰であつてもね」

「そうきますか」

「私は博愛主義者だから」

かなり自分自身に対して甘い言葉であつた。

「差別は嫌いななのよ」

「女の子だけではなく」

「そう、男の子もね」

「それは変わらないのですね」

「そうよ。ところで」

沙耶香は話題を変えてきた。ここでメイド達を休ませ二人きりになる。もうデザートまで食べ終えていた。ワインを側に置きゆっくりと話をはじめた。

「今度は黒薔薇の番ね」

「ですね」

事件の話であつた。二人の目が険しくなつた。

「それで庭を調べてわかつたことですが」

「何かしら」

「薔薇の位置ですけれどね、予想通りでしたよ」

「予想通り」

「はい。五行思想の通りです」

速水は述べた。

「中央に黄色い薔薇、東に青い薔薇」

「そして南には赤薔薇、西には白薔薇」

「最後に北には黒薔薇です。しかもそれを左右対称に配しています」
「左右の庭にそれぞれね」

「はい。何処か魔法陣めいていますね」

「そうね、しかも二つだと」

「もう一つ思想も加わってきます」

「陰陽ね」

「ですね。おそらくそれでしょう」

「そして使われた薔薇はどちらの薔薇だったのかしら」

「館から見て左手」

「じゃあ門から見ると東になるわね」

「そうですね、つまり陰になります」

五行にもそれぞれ陰陽がある。青と黒が陰、白と赤が陽なのである。つまり東と北は陰になり西と南は陽になるのだ。そうした細かい分け方も為されているのである。

第二十四章

「陽の庭からは全く使われていません」

「あえて陰の庭の薔薇を使っているのね」

「そうですね」

「陰を占め、そして陽は開けている」

「これにも何らかの細工があるのでしょね」

「どうやら一連の事件の犯人はそうした中国の思想にかなり詳しいようね」

「そうですね、間違いなく」

それは速水も確信していた。

「かなりのものだと思って間違いないでしょう」

「その人物が五色の薔薇を使って何を考えているかね」

「よからぬことではあるのは確かですが」

「それをちよつと占ってもらえないかしら」

「相手が何を考えているか」

「そうよ。それはわかるかしら」

「お安い御用です。それでは」

懐からカードを取り出した。それは塔の正であった。

「………よりによってこれですか」

速水はそのカードを見て苦い顔を作った。

「どうやら相手が考えていることは私達にとって最悪の事態の様です」

「まさかとは思ったけれど」

沙耶香はそのカードを見て言った。表情は変わらないが声には少し溜息がこもっていた。

「最悪みたいね」

「ですね」

塔のカードはタロットの大アルカナの中では最悪であると言って

もしい。普通のカードは逆になれば意味が正反対に変わり、よいカードは悪く、悪いカードはよくなったりする。吊るし人のカードにしるその意味はよくもとらえることが可能である。月や悪魔のカードも同じだ。だが塔は違う。バビロンの塔を表わしていると言われているこの塔は破壊や破滅といった意味を表わしている。逆であってもそれ程意味は変わらない。何処までも最悪のカードなのである。占い師の中にはこのカードを見ただけで顔を顰めさせる者までいる程である。

「まさかそれが出るなんてね」

「相手はとんでもないことを考えていますね」

「ええ、それはよくわかったわ」

沙耶香は速水がカードをポケットの中に収めるのを見ながら言った。

「破滅、かしらね」

「それが目標ならば」

「美女達は生贄ね」

「生贄ですか」

「そうよ、破滅の為の生贄よ」

彼女は述べた。

「五人の生贄。それが全て奉げられた時に」

「破滅がはじまると」

「そしてそれを止める為には」

「まずは犯人を見つけ出すことでしょう」

それが速水の出した結論であった。

「相手は攻める側です」

まずはこう前置きした。

「攻撃点は向こうが選びます」

「そしてこちらはそれを防がなくてはならないと」

「事前にどう来るのかわかっていればいいのですが」

「それにはまず前提が必要ね」

沙耶香はいきなり核心をついてきた。

「誰を狙うのか、そして相手は誰か」

「この館にいる全ての人にガードをかけますか？」

「それは無理よ」

この提案には残念そうに首を横に振った。

「そうしたらそうしたで魔力を消耗して」

「敵に向かえないですか」

「ええ、事件を終わらせるには犯人を始末するのが一番大事だけれど」

「その肝心の犯人がわからない」

「だから一番簡単なのは」

「犯人を探し出して倒す」

「そう、それが一番なのよ」

沙耶香は話の元を潰すことを考えていた。それを速水に述べたのであった。

「どうかしら」

「やはりそれしかないですね」

それには速水も賛成の意を示した。

「根元を断つ。それが一番です」

「そうということね。じゃあ後は」

「犯人を探し出すのですが」

速水はそう言いながら沙耶香に目をやった。それから述べた。

「何かいい考え、ありますか」

「貴方にはないのね」

「カードは。何も教えてはくれません」

「目は」

「それもね」

残念そうに苦笑いを浮かべた。

「何も反応はありませんね」

「今のところ八方塞りというわけね」

「打開策は探っているのですがね」

「それは私もよ」

そう言ったところで後ろから影が浮き出てきた。

「彼女達も動因しているけれど」

「何もなしですか」

「証拠はね。さて、どうしたものかしら」

「これ以上の犠牲者を出すわけにはいきませんが」

「難しいわね、正直」

沙耶香の言葉は溜息が混じっていた。

「この有様だとね」

「伝えられている生贄は後二人」

速水はそれを口にした。

「その二人は何としても防がなければなりません」

「策はあるかしら」

「カードを一枚一枚この館の人達に潜ませますかね」

「カードを」

「はい、これは私の目であり耳でもありますから」

速水の術の一つである。彼はタロットカードから物事を見聞きできるのである。

「これを使えば。力もあまり使いませんし」

「じゃあそれをお願いできるかしら」

「はい、それでは」

速水は懐からカードを取り出した。そしてそれを宙に放つ。

「行け」

宙に放ったカード達に言う。するとカードはそのままそれぞれ何処かへと飛び去り姿を消した。後には沙耶香と速水だけが部屋に残った。

第二十五章

「これでまずはよしですね」

「残ったカードは遊軍ね」

「というよりはトラップです」

「トラップ」

「館の怪しい場所にね。潜ませます」

「そのうえで相手を探る」

「果たしてかかるかどうか」

「かかればそれでよしだけれど」

「かからなければそれはそれでまた手を考えなければなりませんね」

「そうね。まずはそれで」

「はい。……んっ!？」

話を終えようとしたところで速水は急に声をあげた。

「どうしたの？」

「庭に」

「庭に!？」

「はい。若しかすると」

速水の顔が急に曇っていく。

「くっ」

「あまりいいものが見えていないわね」

「はい、残念なお知らせです」

速水はその曇った顔を引き攣らせて言った。

「四人目です」

「そう。庭ね」

「はい、今から行きますか」

「ええ。じゃあ行きましょう」

「はい」

「ちよっと」

沙耶香は鈴を鳴らした。そしてメイド達を呼び戻す。

「何でしょうか」

「食事は終わったわ。それでちょっと庭に出たいのだけれど」

「庭にですか」

「あまり言いたくはない話だけれどね」

「……はい」

その言葉を聞いてメイド達も何の為に庭に出るのか察した。暗い顔になり俯いた。

「それでは御気をつけて」

「ええ。後片付けは頼むわね」

「はい」

「デザートも素晴らしかったですよ」

速水が最後にメイド達に対して言う。

「チョコレートアイス。絶品でした」

「やはりアイスはヨーロッパに限るわね」

沙耶香も言った。

「気品が違うわ」

デザートへの賛辞を残して二人は庭に出る。夜の庭は暗闇の中に消え何も見えはしない。ただ薔薇の濃い、眩暈がする様なまでの香りがそこに立ち込めていた。

「場所ですが」

「今灯りを点けるわね」

沙耶香は目の前で親指と人差し指を弾く。するとそこに青い炎が姿を現わした。

「火ですか」

「ええ、貴方にも」

速水の前でも指を弾く。するとそこにも火が姿を現わした。

「これで暗くないわよね」

「有り難うございます」

「そしてその場所だけれど」

「陰です」

速水はまずこう言った。

「そして北です」

「やっぱりね」

それだけ聞いて沙耶香はそれが何処なのかわかった。

「そこにどうなっているの」

「仰向けに寝ています」

速水は探る顔で述べた。どうやらその場面が今の彼にははっきりと見えているらしい。

「薔薇の棘で首を絞められています」

「薔薇の棘で」

「はい、今から行きましょう」

火の灯りを頼りに現場に向かう。その現場をさらに火を増やして照らすとその中に仰向けになった一人の少女の屍が浮かび上がった。

「メイドの娘みたいね」

「そうですね」

速水は沙耶香の言葉に頷いた。それは制服でわかった。

「見れば綺麗な娘ですが」

「あと少して擦れ違った男も女も振り向く程になれたでしょうに」

その少女はかなりの美貌の持ち主であった。栗色の大きな瞳に黒い髪を肩で揃え、鼻は高く唇は小さく赤かった。小さい形のいい顎に長い首を持つていた。だがその首には薔薇の棘が巻き付き、唇からは血を流して事切れていた。栗色の瞳は空を見詰め、光はない。

そのモデルと言っても通用するような高く見事な身体の周りには黒薔薇が無数に置かれていた。

第二十六章

「やはり黒でしたか」

「それにしても夜に殺すなんて」

「しかも庭で」

「私達の不意をついたつもりかしら」

「少なくとも意識はしているでしょうね」

速水はそう感じていた。

「だからこそあえてこうした挑発的な殺し方をしている」

「目立つように」

「ですね、私はそう思います」

「そうなの」

「そんな殺し方をするとなれば」

「人も限られてくるけれど」

だが。それが誰なのかはようとして知れなかった。さしもの沙耶香も犯人を見つけられないでいた。

その夜は二人で遺体を調べた。それから従医に頼んでその遺体を一時安置してもらった。あれこれしている間に朝になってしまっていた。

「お疲れ様です」

「いえ」

医者の方の言葉に伝える。見れば医者は二十代後半か三十になつたばかりであると思われる細面の美男子であつた。長い髪を後ろで束ね一見すると女性にも見える。だがその高い背が彼を男であると言わせていた。少なくとも誰もがそう思えるものであつた。

二人はこの従医に挨拶をした後で医務室を後にした。とりあえず遺体は地下で冷凍され安置されるという。この屋敷にはそうした場所も備わっているのである。

「これでやっと終わりですね」

「そうね」

速水は医務室を出たところで沙耶香に声をかけてきた。

「もう朝ですか」

「夜更かしの経験は多いけれど」

沙耶香はそれに応える形で窓から差し込めてくる朝日を眺めながら呟いた。徹夜であつたが二人にはとりあえず疲れは見えてはいなかつた。

「あまりこうしたこと夜更かしはしたくはないわね」

「女の子と一緒にならですか」

「それが男の子とね」

沙耶香は媚惑的な笑みを浮かべてこう述べた。

「一緒ならいいのよ」

「それはまた贅沢な」

「あら、私にとってはいつもそうね」

その媚惑の笑みを浮かべ続けたまままた言った。

「そんな夜はね」

「好きなことで」

「けれど妙ね」

「何がですか？」

沙耶香は笑みを消してふとこう呟いた。

「あのお医者さんよ」

「あの方がどうかしましたか？」

「男の人よね」

「ええ」

速水はそれに頷いた。

「そうですね。確かに綺麗な方ですが」

「そうですね」

それを聞いてもまだ納得しきれないものを感じているようであつた。

「男よね」

沙耶香は口に左手の人差し指を当てて呟いた。

「背は一八〇近いし」

「スラリとした長身ですよ」

「そうよね、モデルでもそうはいないわ」

日本人ではだ。もっとも他の国でも一七五を超える女性は滅多にいるものではないが。かつてイタリアにレナータ・テバルディという歌手がいたが彼女は何と一八五あり木に例えられることさえあった。これは例外中の例外である。だから話に残っている。あまりにも背が高く、共演者はバランスを取るのに苦労したという。彼女と背において張り合えたのはフランコ・コレツリという美男子のテノールであったが彼にしてもこのテバルディと同じ程であった。ちなみに彼女はおおらかで優しい性格として知られていたがコレツリはかなり神経質で短気であつたらしい。彼と冗談を言い合える程仲のよかつたある歌手なぞはそれで人間性がしつかりしているとまで評された程である。

「それを考えると男よね」

「体格もそうです」

「ええ。けれど」

「けれど？」

沙耶香はまだ引つ掛かるものを感じていたのだ。

「気配がね。おかしいのよ」

「気配ですか」

「貴方は何も感じなかつたかしら」

「そうです」

速水はそれに応えて考える顔になった。そして医者と会っていた時のことを思い出す。

「私は特には」

「そうなの」

「はい。何も感じませんでした」

「何かね、変なのよ」

「変？」

「そうなのよ。あの人からは女の気配を感じたのよ」
「女の」

「巧妙に隠してあるような。何かしら」

「だとすれば何故ですかね」

速水もそれを聞いて考える顔が続けた。

「男である理由は」

「それを隠さなければならぬ理由があるならば」

「それは一体」

「何かしらね」

「この一連の事件に関係があるのかないのかは別に引っ掛かります」
「ええ」

「何故それを隠しているのか」

「それも調べようかしら」

「それには及ばないでしょう」

しかし速水はそれは制した。

「既にカードを散らしていますし」

「それでわかるのね」

「はい、事件と関係あればね」

「それでどう思っのかしら」

沙耶香はそのうえで速水に尋ねてきた。

「お医者様ですか？」

「そうよ。シロかしら。それとも」

「極論を申し上げますとここで怪しくない人間は二人しかいません」

「その二人は誰かしら」

「私と貴女です」

それが速水の言葉であつた。

「他の方々は率直に述べさせて頂きますと」

「誰もが大人なり小なり怪しいのね」

「そうです。何人かはそうではないとわかりましたが」

「そうね」

神父やメイド達のうちの何人かがそうであった。そしてソムリエのエレナもである。エレナに関しては沙耶香本人が肌を重ね合っていて確かめているから間違いはなかった。

「それでもやはり」

「怪しい人間の方が多いわね」

「犯人が複数いる可能性もありますがね」

「どうかしらね、それは」

だが沙耶香はそれには懐疑的であった。

「その可能性は少ないと」

「流石にここまで悪趣味にやれて、五行思想の知識がある人間が複数いるとは考えられないわ」

「左様ですか」

「それに殺し方があまりにも独特ね」

「それは確かに」

速水もこれには同意であった。

「複数犯にしては」

「そうしたこととも考えていくと」

「犯人はやはり単独だと」

「それでカードだけねど」

「はい」

話はカードにも及んできた。

第二十七章

「塔だったわね」

「はい、文句なしの最悪です」

「ヒントにも何にもなりはしないわね、正直」

「ですが必ずヒントは何処かにある筈ですが」

「それを探し出せということね」

「ではまたカードを引いてみますか？」

「それで何かわかるのならね」

沙耶香は答えた。

「引いてみて」

「わかりました。では」

沙耶香の言葉を受ける形でまたカードを引いた。そこに出て来たのは女教皇の逆であった。

「これは」

「カードから何か感じるかしら」

「女性ですね」

速水は答えた。

「それも知的な」

「知的」

「はい、それに隠れているということでしょうか」

彼は言った。

「そうしたものを感じます」

「女教皇本来のものとは少し違うみたいね」

「違いはしませんがこれは」

速水は引き続いて述べた。

「これは？」

「濁った感情も見えます」

「女性特有の」

「そうですね。そうした意味で確かに女性的です」

女教皇は女帝と並ぶ女性的なものを象徴するカードである。女帝が母性を象徴しているのに対して女教皇は女性的な知恵等を表わすのである。それが逆になったならばヒステリーや過剰な潔癖等女性に陥り易い精神的なものを表わすようになるのである。

「ただ。これだけではどうにも」

「そうね。掴めないわ」

沙耶香にもそれがわかりかねていた。

「最初のケルト十字だけれど」

「はい」

そこにも話が及んできた。

「ある程度わかってきたわね」

「そうですね。まず一枚目は」

「この事件が正直かなり運命的なものであること」

「はい」

「そして二枚目だけれど」

「教皇の数字ですね」

「そう、それは五」

「五色の薔薇を使ったものでした」

「見事に当てはまっているわね」

「そして三枚目も」

「あれは言うまでもなかったわ」

星の正である。二人は満足いく解決を目指していたのだから。それは既に大きく破綻してしまっているが。

「月の正も」

「そうね、見事にね」

これもまた。二人は今事件が解決出来ず不安定な状況に陥っている。

「六枚目と七枚目も」

「当たっています」

「その塔の逆ね。最悪ね」
「はい」

既に四人。残る一人は誰なのかといった有り様であった。リーチがかかっているのだ。

「しかもそれに対して私達は袋小路」

「その通りです。私の占いは当たります」

「そちらの方の腕もまた上げたわね」

「有り難うございます」

これは占い師にとっては褒め言葉であった。

「こちらでも名前を知られているのですよ」

「私はそちらではあまり聞かないけれど」

「いえいえ、雑誌でも連載を持っていますし」

速水は笑いながら述べた。

「これで中々売れっ子なのですよ」

「その売れっ子が示してくれているのだから安心していいのね」

「是非共」

速水は右目と口でにこやかに笑ってそう返した。

「そして八枚目ですが」

そのうえで話を戻してくる。

「それは言わなくてもわかるわ」

「魔性ですか」

「そう、相手はね。ただここで気になるのは」

「まだわかっていない残り三枚のカードの結果」

「五番目と九番目、そして最後の十番目で」

「ええ。ただまず十番目は置きますか」

「そうね。それは最後の結果だから」

「それでは」

「五番目と九番目ね」

「実は私にもわかりかねているのです」

速水は今さっきの言葉を早速自分で否定してしまうような言葉を

口に出した。

「恋人の逆」

「それね」

「実っていないのなら私達も同じですが」

「これが占われたのは事件が起こる前だから」

「必然的にこれは犯人の側に向けられたものになります」

「今まで実っていなかった」

「犯人には長い間望んでいた欲求があるようですね」

「だとすると一体」

だがそこまでは到底わからない。二人はそもそも犯人の尻尾すら掴んではないのだから。それでわかるという方が無理な話なのである。

第二十八章

「これもわかりませんが九番目はさらに」

「解決するにはまず発想の転換を」

「どうということなのかしら」

「どうやら犯人は女性のようですが」

速水はここで今さっき一枚で占ったカードの結果を出してきた。

「だとすると余計に限られますが」

「この館の中にいる女性」

「生き残っている方や既に無実がわかっている方も含めて」

「確かにそれはかなり限られてきているわね」

「誰だと思われませんか？」

「正直今でもまだわからないわ」

沙耶香は首を少し横に振って述べた。

「ただ、引つ掛かるのは九番目のカードね」

「死神の逆ですか」

「そう、それが一番謎ね」

「ただ、これが最も重要ですね」

「ええ」

沙耶香も速水もそれは感じていた。

「しかしこれがどうということなのか」

「それがわからないのよ」

カードを引いた速水自身ですらわかりかねていたのだ。それだけ

意味不明なカードであったのだ。

「このカードがね。何が言いたいのか」

「それに五番目は」

「犯人と関係があるのかも、とも思っけれど」

「犯人とですか」

「あくまで勘よ」

沙耶香は述べた。

「勘でしか感じないけれど」

「そうですね」

「とりあえず一番の問題はその九番目ね」

「はい」

「これが何なのか、それがわかれば事件は解決に向かうと思つわ」

「わかりました。ではまずは」

「いよいよ最後の一人よ」

「今度は青薔薇ですね」

「何をしてくるのかわからないけれど」

「次の事件を防がないと恐ろしいことになりかねないのはわかります」

「そうですね。じゃあ」

「はい」

沙耶香は部屋を出た。速水はまたカードを引きはじめた。それぞれ捜査を開始した。沙耶香は屋敷の中を歩きながら複数から光が当たるのをまずは利用してきた。

複数の光が当たればその光の数だけ影が現われる。すると沙耶香はその影が現われる度に放っていったのだ。

「影は多い方がいいわね」

そう呟きながら。その全ての影で捜査を行うのであった。

だが本来の影は残した。それは歩きながら後ろに出した。影は次第に色を持ちはじめもう一人の沙耶香になったのであった。

「また私の出番なのね」

「そうよ」

もう一人の自分に対して言う。後ろは振り向かずそのまま歩く。影が変化したもう一人の沙耶香はその後ろを音もなくついてきていたのである。

「事情はわかっているわね」

「ええ」

影は答えた。

「ずっと見ていたし屋敷の中も歩いてきたから」

「そうだったわね」

前にも影を飛ばしている。そして今も。だから影もまた全てを知っていたのだ。

「言いたいことはわかってるわ」

「話が早いわね」

「捜査ね」

「そうよ」

本体の沙耶香が影の沙耶香に対して言った。

「もう後がないわ。最後の薔薇を止めて」

「貴女はどうするの？」

「一つ考えがあるわ」

そう言つてにやりと笑つた。

「楽しみながらね」

「相変わらずね、それは」

影は本体の言葉を聞くとうつすらと笑つた。本体とは違う笑みであつた。

「じゃあ私はこのまま」

「お願いするわ」

「そして貴女は」

「女の子から話を聞くには鞭はいらないのよ」

これが返事であつた。

「ただ、毒があればいいだけ」

「毒ね」

「そう。このうえなく甘美でとろけるような毒が。それが全てを導いてくれるわ」

「じゃあ期待しておくわ」

影は最後にこう言つた。

「吉報を」

「ええ、期待していい」

沙耶香は影の本体とも別れた。そして影をなくした身である場所に向かった。そこは医務室の隣にある看護婦の待機室であった。二人いたが一人が犠牲になり今は一人だ。その一人がそこに待機していたのであった。

第二十九章

「あら、お客様」

そこにはうら若き白衣の天使がいた。歳は二十程であろうか。楚楚とした顔立ちに優しそうな表情を持っている。白い服が窓から差し込めてくる光を弾き眩いばかりに輝いている。沙耶香はその美しい看護婦のところによって来たのだ。

「何か御用でしょうか」

「聞きたいことがあって」

看護婦の問いにそう返した。見れば部屋は医務室とは少し違う。清潔で消毒液の匂いがするがそこにあるのは患者用のベッドではなく仮眠用のベッドであった。看護婦用にあえて用意された部屋なのである。

「御聞きしたいことですか」

「そうよ。ここにいる人達のことだけけれど」

「はい」

「何か変わったことはなかったかしら」

「変わったことですか」

「そうよ、看護婦の貴女から見て」

「そうですね」

とりあえず思うことを言おうとする。だが沙耶香は急にその目の前から姿を消した。

「えっ」

看護婦はそれを見て目を丸くさせた。

「御客様、何処へ」

「ここよ」

声が出た。しかしまだ姿は見えない。

「何処でしょうか」

「ここよ」

また声がした。すると目の前に沙耶香が姿を現わしたのであった。
「何時の間に」

「細かいことはどうでもいいわ」

それ以上は言わせなかつた。すぐに小さな紅の唇を奪った。

「うっ」

口の中に舌を入れる。看護婦の舌に触れるとそこに絡ませてきた。
濃厚なディープリキスを味わいはじめた。

看護婦は最初は抵抗しようとしたがすぐに身体力が抜けてしまった。沙耶香はそんな彼女を横にあるベッドに押し倒した。

「口から聞く言葉は偽りだから」

看護婦の上で赤のネクタイを外しながら言う。

「心に聞いわ」

「心につて」

「そうよ、貴女の心に」

白衣の天使の上に漆黒の墮天使が覆い被さり汚そうとしていた。そうした姿であった。その漆黒の墮天使は天使の身体と心を奪った。全てを奪い、何もかもをその手の中に収めたのであった。

情事の後。沙耶香は部屋の椅子に座っていた。服は着ていたが力ツターの胸元ははだけさせたままであった。そこから豊かな胸が見えていた。

「そういうことなのね」

煙草を手にして言った。青い煙が煙草から立ちこめていた。

「やっぱりあの人ね」

「はい」

看護婦はベッドの中で一糸纏わぬ姿になった。頬を赤らめて頷いた。

「私はこの仕事で多くの人の身体を見てきましたが」

「違うと思ったのね」

「そうです。服の上からでもわかります」

「ふん」

「それに。柔らかさで」
「それはね」

沙耶香はその言葉を聞いてうつすらと笑った。これは彼女にとつては専門分野であったのだ。

「わかるんですよ」

「それである人はおかしいと」

「はい」

あらためてこくりと頷いてきた。

「私はそう思います」

「わかったわ、これは重要な証言になるわね」

「重要な、ですか」

「ええ、これで話が繋がってきたわ」

煙草の煙を眺めながら言った。青い煙が部屋の中でゆらゆらとたゆり、そして消えていく。沙耶香はそれを眺めながら言ったのであった。

「終わるわ、この話」

「はあ」

これは看護婦にはよくわからない話であった。沙耶香と速水だけがわかる話であった。

「あつ、何でもないわ」

「左様ですか」

「けれどこれで何はともあれ」

煙草を消した。ふうつと息を吹きかけるとそれで砂の様に消え失せてしまったのだ。

「話が全部繋がったわ。それじゃあ」

「帰られるのですか？」

「そうよ」

立ち上がって答えた。

「また来ていいかしら」

「また」

「ええ、貴女さえよければ。今度はプライベートでね」
目の中だけで笑いながら看護婦に対して言った。誘いをかけている目であった。

第三十章

「どうかしら」

「そんな、私には」

そう声をかけられて明らかかな狼狽を見せる。

「御客様ですから」

「はつきりしないわね」

声にも笑みを含ませてきた。

「私ははつきりした言葉じゃないとわからないわよ」

「えっ」

「どうなのかしら。お邪魔していいのかしら」

「………はい」

もう抗らうことは出来なかった。その白い雪の様な顔を紅葉の様に紅くさせ願った。全ては沙耶香の思い通りであった。

「わかったわ、それじゃあ」

沙耶香はまた一人陥としたことを心の中で確かめながら言った。

「またね」

「はい」

沙耶香は部屋を出た。すぐに速水の部屋に向かう。その顔は密かに笑っていた。

「これでよし」

事件はこれで終わる、薔薇の犠牲者も止められる、そう思っていた。しかしそれはいささか甘い考えであった。彼女は時間を操る魔術を知らない。時は彼女には支配されない存在であるから。時間が話を動かしていたのだ。

沙耶香が廊下を進んでいると速水が前からやって来た。そして深刻な顔で彼女に声をかけてきた。

「いいところに」

「探していた、ということね」

「そうです。してやられました」

「言いたいことはわかったわ」

速水の言葉とその様子で何が起こったのかすぐに察した。

「やられたのね」

「はい」

速水は沈痛な声で答えた。

「青です」

「わかったわ。場所は」

「木の上です」

「木の！？」

「はい。そこに犠牲者の遺体があります」

「その木は何処なの？」

「庭の端です。行かれますか？」

「勿論よ」

沙耶香の言葉に躊躇はなかった。すぐにそう答えた。

「じゃあ行きましょう」

「はい」

こうして二人は庭を出た。その顔はどちらも苦々しげなものであった。

並んで屋敷の門を出る。そして庭に向かうがその途中で沙耶香は速水の心に語り掛けてきた。

『面白いことがわかったわ』

『それはまさか』

『ええ、そのまさかよ』

二人は心の中で話をする。それは他の者には決して聞こえはしない。

『あの死神の逆と繋がったわ』

『発想の転換ですか』

『ええ、まさにそれよ』

沙耶香は速水に心の中で語った。

「見事に的中してるわよ」

「それは冥利に尽きますが」

「お互いわかるのが遅かったわね」

「はい」

速水の声は心の中でも沈んだものになっていた。

「無念です」

「これで五人目」

沙耶香はまた心の中で言った。

「犯人の思惑通りになったわね」

「してやられました」

「こうなったら最後の手段ね」

「やるんですね」

「そうよ、相手はもうわかったから」

沙耶香は心の中で述べた。

「それしかもう方法はないし」

「わかりました。では今は」

「ええ、遺体ね」

「はい」

速水は正面を向いていて一見沙耶香と話をしているようには見えない。だが彼も沙耶香も心の中でしっかりと話をしていたのであった。

二人は心の中で話し合い今後の打ち合わせをしていた。そしてその木の下にやって来たのであった。

「ここね」

「そうです」

今度は口で話した。そして木の上を見上げる。

その木にいたのはメイドの一人であった。あの金髪のメイドであった。

その木の枝の上に仰向けに横たわっていた。そして首から血を流し、全身を蒼白にさせて事切れていた。

「首に……あれは」

そこにあつたのは青い薔薇の花びら。それが異様なまでに鋭くなつていた。それで切られたようである。

「花びらに細工ね」

「ですね」

「それで動脈を。やってくれるわね」

そこから夥しい血が流れていたかといえはそうではなかった。血は殆ど流れてはいなかった。だがその青い顔から彼女が既に事切れているのがわかったのである。

第三十一章

「これで五人です」

速水はまたしても忌々しげに述べた。

「遂に完全に裏をかかれ続けましたね」

「そうね、薔薇も全て揃ったわ」

「はい」

「チエックメイト、ってところかしら」

「いえ、それはまだです」

しかし速水はそれは否定した。

「だが打つ手はありますよ」

「五人の命が奪われたというのに？」

「はい、まだ手はあります」

「それは何かしら」

「いつもの貴女のやり方ですよ」

速水はここでうつつすらと笑ってこう述べた。

「私の？」

沙耶香はその言葉に少し考える目になったがすぐにその意味を察した。そのうえでうつつすらと笑ってきた。

「いいのかしら、それで」

笑ってこう述べる。

「私のやり方は貴方には合わないわよ」

「何、合わせませよ」

しかし役の返事は落ち着いたものであった。もう慣れているといった感じさえ漂っていた。

実は彼は沙耶香とは長い付き合いである。その間に今のように共に事件にあたることも多かったのでそれで慣れているというふうに言えたのである。

「御心配なく」

「じゃあわかつたわ」

沙耶香はその言葉を聞いて頷いた。

「それでいくわよ。いいわね」

「了解です。そしてまずは」

「彼女ね。にしても」

木の上のメイドを見る。非常に美しい顔である。プロポーシヨンもいい。沙耶香の好みの中の一つの女の子であった。彼女はそれが残念でならなかったのだ。

「残念なことね」

「そして」

「惨いことね」

犯人に対しても憤りを感じる。出し抜かれたことに。沙耶香は人の生死や倫理には捉われはしない。だがそれでも出し抜かれたことには不快なものを感じる女であった。そして今がそれであった。彼女にとって犯人は何としても倒さなくてはならない相手となっていたのであった。

「私の御馳走を攫ってくれたこと、後悔させてあげるわ」

そう言つと遺体を収めて屋敷の中に戻った。五人の犠牲者、手紙にあつた通りになった。沙耶香はそれに忌々しいものを感じていた。だが。決して諦めてはいなかったのであった。

二人は屋敷に帰るとすぐに行動に移った。屋敷の中にある誰もいない一室。そこは屋根裏であつた。

「ここならいいですね」

「そうね」

二人は頷き合つた。まずは速水がカードを出した。

「まずはこれを」

それは運命の輪のカードであつた。

「そして私はこれを」

沙耶香は手に黒い炎を出してきた。二人はそれを合わせる。

「ではいいですね」

「何時でもいいわ」

その二つを合わせるとカードの中の運命の輪が回りはじめた。そこに黒い炎が交わっていく。そして輪は炎の輪となったのであった。黒い炎の輪に。

二人はそれに対して何か詠唱をしていた。それが終わった時はもう夜であった。

二人は夜の闇の中に姿を消した。そして。チェスの駒を動かすしに向かうのであった。チェックメイトからこちらがそうする為に。今動いたのであった。

第三十二章

夜の庭。今ここに一つの影がいた。影は闇の中に紛れながらその中で何かをしようとしていた。

「これでよし」

そしてその闇の中で呟く。

「全ての準備は整った。五色の薔薇も」

言葉は地の底から響く様な不気味な響きがあった。それは女の声であった。

「生贄も何もかもが揃った。後は」

「何をするつもりかしら」

だがここで他の者の声がしたのであった。

「!？」

「貴女のこととはわかったわよ」

闇の中から白い仮面が姿を現わした。いや、それは仮面ではなかった。服が闇の中に溶け込んでいたのだ。それは沙耶香であった。

「高田洋一、いえ高田依子さん」

「私のことを。見抜いたのね」

「そうよ、かなりてこずったけれどね」

「誰にもわかりはしないと思っていたけれど」

「生憎そうはいかないものよ、世の中は」

沙耶香は依子と呼んだその女の前に来た。そこにいたのはあの従医であった。彼女は沙耶香が最初に感じたようにやはり女であったのだ。白衣のまま庭の上に立っていたのだ。

「何でも思い通りになることはあまりないのよ」

「そうなの」

「私だって女の子だけだから。完全に思い通りになるのは」

「言っわね」

「ええ、言っただけわ」

依子を見据えて言う。

「貴女はここで私が消してあげるから。何でも聞いてあげるし」

「私を!？」

「そうよ」

依子を見据えて言った。

「私は今まで魔術で負けたことはないわ」

これは本当のことである。こうした時の沙耶香は嘘は言わない。

「誰にもね。だから覚悟するのね」

「面白いことを言うわね」

しかし依子も負けてはいなかった。その中性的な整った顔に不敵な笑みを浮かべてこう返す。

「私も。負けたことはないのよ」

「そうなの」

「ええ、だから貴女もね」

「それは一対一ではですね」

ここでもう一人の声がした。

「今度は」

「客は二人いたのは。御存知ですね」

「くっ」

「貴女のこととは調べさせてもらいましたよ、高田依子さん」

今度は速水が姿を現わしてきた。沙耶香の横に姿を現わす。

「かつて我が国の魔術でその名を知られた高田真夜子の孫娘にして最後の弟子」

「そこまでわかっていているのね」

「はい、あの方には私達もかなり御世話になりましたから」

ここで速水も夜の闇の中にその姿を完全に現わした。そして沙耶香の横に立っていた。

「あの時は。私も沙耶香さんも死ぬかと思いましたがよ」

「確かにね。苦い思い出だね」

沙耶香も言った。僅かに苦さが含まれているのがそれが真実だと

語っていた。

「あの人は今どうしているかしら」

「貴女達の方が知っているとと思うけれど」

依子は言い返した。

「もう。冥府よ」

「そうよね」

「まあこの目で確かめましたが」

「まさかこんなところで出会うなんてね」

依子はここで二人を見据えて苦笑いとも挑戦とも見える不思議な笑みを浮かべてきた。

「思いも寄らなかつたわ」

「ええ、こちらも」

沙耶香もそれに応える形で言った。

「まさかあの人に孫がいたなんて」

「只の孫じゃないわ」

依子は言う。

「私は御婆様の最愛の孫にして最後の弟子」

「そう」

「そしてその夢を受け継ぐ者」

「じゃあここでそれを実現しようとしているのね」

「そうよ、五人の生贄で」

依子は言った。

「五色の薔薇に捧げた五人の生贄」

「陰の薔薇によりそれを刻み」

「陽の薔薇の園でその陰の力を解放しそこに魔を招く」

「そうよ、この世に魔界を作り出す」

依子はそう言いながらぞっとする笑みを浮かべてきた。それは人ものとは思えないものであった。魔界に棲む異形の者達の笑いそのものであった。

第三十三章

「それこそが御婆様の夢だったのだから」

「滑稽なことね」

だが沙耶香はその言葉を一笑に伏した。

「滑稽！？この世に魔界を作り出すことが」

「そうよ、この世は既に魔界でもあるのだから」

沙耶香は述べた。

「特にこの国の都は。美味な魔都よ」

「戯言ね」

「いえ、戯言ではないわ」

沙耶香の声が紅のワインの中にルビーを滴らせた様な妖しい音色を帯びてきた。

「その証拠に私がここにいるのだから」

「貴女が」

「ええ。そして今ここにいる」

その手に妖しい紅い光を浮かび上がらせてきた。すると周りに五色の薔薇の花々が浮かび上がる。

「この魔術に依って」

「御婆様の仇を言うつもりはないけれど」

依子は言う。言いながら二人に正対する。

「貴女達をここで逃すわけにはいかないようね」

「それはこちらもです」

速水はその両手にタロットカードを出してきていた。

「貴女により五人の罪もない方々が命を失っております」

「私にとっては人の道はどうでもいいことだけれど」

沙耶香も述べた。薔薇の花々は蝶になろうとしていた。五色の蝶が夜の闇の中に浮かぶ。

「それでも。出し抜かれたことがね」

「このまま誤魔化せると思ったけれど」
「お生憎様」

沙耶香はうつすらと笑ってそれを否定した。
「残念だけれどそうはいかないわ」
「じゃあわかったわ」

依子の周りに無数の炎が浮かび上がる。青白いその炎は鬼火であった。

「ここで貴女達を倒してあげるわ」

「あの人と同じ火ね」

「そうですね」

二人は依子の火を見て言葉を交あわせた。

「血縁だからやっぱり似るのね」

「ええ」

「御婆様が倒られたのは知っていたけれど」

依子はその炎を周りに漂わせながら言う。

「それが誰かはわからなかったわ。それに知ろうとも思わなかった」

「そうだったの」

「知ってもさつき言った通り仇とかは考えないから。それは安心していいわ」

「じゃあ只の敵として」

「ええ、私の夢を阻む敵として」

三人の間に妖気がいよいよ増してきていた。

「消えてもらおうわ」

「こちらも。これが仕事だし」

「五人の方々の為にも」

それぞれ言いながら身構える。

「行きますよ」

まずは速水がタロットカードを投げてきた。数枚のカードが依子に襲い掛かる。

だがそれを見ても依子は冷静なままである。うつすらと笑みすら

浮かべていた。

「まさかこの程度で」

依子は言った。

「高田真夜子の最高の弟子を倒せると思っているのかしら」

周りの炎を動かすこともなかった。指を鳴らしただけでカードが全て炎に包まれてしまった。

「ふむ」

速水はその様子を右目で見てふと声を漏らした。

「やはりこの程度では無理ですか」

「小手調べというわけね」

「ええ、それでは次は」

「待って」

だがここで沙耶香の念が辺りを覆った。

「今度は私が」

「左様ですか」

「ええ、あの時はかなり苦労したけれど」

「御婆様にね」

「そうよ。けれど今はあの時とは違うわ」

その周りに無数の蝶を漂わせていた。夜の闇の中で幽玄に舞っている。

「それを見せてあげるわ」

蝶がゆつくりと舞いながら依子に襲い掛かる。依子はそれを見据えながら余裕のある笑みを浮かべていた。

「確かに御婆様は凄かったわ」

依子は言う。

「私に魔術を教えてくれたし。けれどね」

その整った琥珀の目が不気味に光った。闇の中で紫色に輝いた。

「ムッ!？」

「私は。その御婆様より上なのよ」

「まさか」

目が輝いただけであつた。それだけで沙耶香の周りの蝶達が崩れ落ちていったのだ。まるで霧の様に消え去つた。

「如何かしら」

その目を輝かせたまま言う。

「私の魔術。御婆様とどちらが上かしらね」

「くっ」

「どうやら尋常ならざる相手みたいですね」

眉を微かに歪めさせる沙耶香に速水が述べた。

「そうね」

答えはしたがそこにある自信は微塵も揺らいでいない。

「そうでなくてはね。面白くはないわ」

「けれど負けたらどうします？あの方のお孫さんですよ」

「あら、変なことを言うわね」

沙耶香の言葉は落ち着いたままである。いささかも変わりはない。

「それが速水丈太郎の言葉かしら」

「私は心配性なので」

「じゃあ私は松本沙耶香としてやらせてもらつわ」

また新たな蝶を周りに浮かび上がらせる。

第三十四章

「そしてこの仕事、やり遂げさせてもらおうわ」
「流石ね」

そんな沙耶香を見て依子はその中性的な顔にぞっとする笑みを浮かべてきた。

「御婆様を退けただけはあるわ」

「その御婆様より上だと言っけれど」

「ええ、そうよ」

依子はそれに返した。

「私も。嘘はつかないわ。自分のことにはね」

「言ってくれるわね」

「だから見せてあげるわ、私の力」

その周りに漂わせている炎を巡らせてきた。

「高田家最高の魔術を」

「来ますよ」

速水が沙耶香に言った。

「炎が。ならば」

またカードを取り出した。今度は投げずにその顔の前ですつと浮かび上がらせた。

「出でよ、節制」

それは十四番目のカード節制であった。速水がカードを浮かび上がらせるとそこから水が溢れ出て来た。

「水!?!」

「火といえばこれでしょう」

速水は依子に答えを返した。

「この魔性の炎もこれならば」

「考えたわね、また」

「何、たまたまですよ」

速水は慇懃に笑って依子に返した。

「買い被られないことです」

「けれどアイディアはいいわ」

しかし沙耶香はそれでも彼を褒めた。

「それを出すなんて」

「貴女はどうされるのですか？」

速水はその身の周りに滝を漂わせながら問う。滝はまるで大蛇の様にうねっていた。

「この水を使いますか？」

「いえ、それには及ばないわ」

だが沙耶香は悠然と笑ってそれを受けようとはしない。

「私も。火なら防げるから」

「ではそれを見せて頂きましょう」

「ええ、見ていて」

その周りには黒い蝶を漂わせている。まるで闇夜の中に舞うあげはの様であった。

「何をするつもりかはわからないけれど」

依子は沙耶香をこの時は侮っていた。そんなものでどうして自分の炎を防げるのかと嘲笑していた。

「それで私を防ぐつもりかしら」

「やってみせてあげるわ」

「言ってくれたわね」

売り言葉に買い言葉になっていた。依子が先に仕掛けてきた。

「この炎、そう簡単には防げはしないわよ」

無数の青白い炎が沙耶香に襲い掛かる。一つ一つがまるで生き物の様に様々に動きながら襲い掛かって来る。だがその危険な炎を前にしても沙耶香は身動き一つしない。

「迂闊ね」

沙耶香は一言そう言っただけであった。

「迂闊！？私が」

「そうよ、これ位中国の術には詳しくない私でもわかっていたのに」
そしてまた言った。

「それを忘れるということが迂闊じゃなくて何なのかしら」

「どうということかしら」

「今わかるわ」

そこに炎が襲い掛かる。しかしその一つ一つにすぐに蝶が張り付いてきた。

「蝶が!?!」

「これは魔術そのものとは関係はないけれど」

沙耶香は笑いながら言う。

「蝶は光に誘われるわ。そして」

次の言葉が決め手であった。

第三十五章

「黒は何かしら」

「！？まさか」

依子はそれを言われてようやく気付いた。

「そうよ、黒は水」

「くっ、五行思想の」

「それはわかっていると思っていたけれど。生贄にも使ったのだし。黒は五行思想では水を表わす。従ってこの黒い蝶達は水の属性を持つのだ。水は火を打ち消す。即ち。依子の炎は全て沙耶香の蝶に打ち消されてしまったのである。」

沙耶香に襲い掛かった全ての炎が消えた。それで依子が出てきた炎は全て消えたのであった。

「迂闊だったわ、確かに」

それは依子自身も認めた。

「ここで水の蝶を使ってくるなんて」

「奇麗だったでしょ」

その言葉に沙耶香は妖艶に笑って返した。

「黒い蝶も」

「ええ、確かにね」

依子も認めた。無論面白くはなかったが。

「それで炎は全部消してあげたわ」

「そうね、けれど」

当然それで諦めるような依子ではなかった。

「これで終わりとは思っていないでしょうね」

「当然よ。次は何かしら」

「本当はもつとランクの低い魔法を使うつもりだったけれど」

依子は構えを取りながら言う。

「そつもいかないようね。なら」

「！？下の薔薇園が」

それぞれ五色の園が竜巻の様に動きはじめた。薔薇園そのものが動いている。依子はその上に立っていた。そして悠然と笑っていたのであった。

「薔薇園が動くということは」

「ええ、貴女の予想通りよ」

依子は動きを速くさせる園の上で応えた。

「五人の生贄を捧げたのはこの為」

「魔界を」

「魔界の瘴気を受けても貴女達なら何ともないでしょうけれど」

沙耶香も速水も唯の術師ではない。その力はあまりにも絶大なものがある。魔界の瘴気程度でやられる人物ではない。しかし。そこからやって来る別の存在に対しては別だ。

「もうすぐここに魔王達がやって来るわ」

依子は述べた。

「魔界の支配者達がね。私の招きに応じて」

「薔薇の魔力と生贄を使って召還した魔王達がね」

「そうよ」

つまり今動いている薔薇の園は魔法陣ということなのだ。五色の配色と薔薇の魔力、そこに生贄を交えて作り上げたものである。恐るべき力を持っていることは言うまでもない。

「それが貴女達の相手をしてくれるわ」

「この世を魔界に変える為の前夜祭としてね」

「魔王にも知り合いはいるけれど」

「けれど魔法陣を開いたのは私」

魔法陣を開いて召喚されたからにはその召喚した者に従わなくてはならない。それが魔界の掟であった。魔界にも掟はありそれはかなり厳しいものであるのだ。

「だから私に従うのよ」

「大した力ね。それだけの魔王達を召喚出来るなんて」

「これも全て薔薇と血のおかげ」

依子はまた言う。

「そして貴女達に最初に見せてあげるわ」

「生憎ですが」

ここで速水が言った。

「私達はまだ死ぬわけにはいかないですよ」

「あら」

「私はまだこの方の愛を勝ち取ってはいないのでですから」

沙耶香に顔を向けて述べた。

「それまでは死ねないですよ」

「じゃどうするのかしら」

「それは決まっています」

薔薇の魔法陣から不気味な七色の光が溢れ出てきている。速水はそれを見てもまだ平然としていた。間も無く魔界の入り口が開らくうとしているのに。彼は落ち着いていたものであった。

第三十六章

「防ぐまでです」

そのことは何でもないと口にしたような言葉であった。

「それだけのことです」

「大した自信ね」

「それは防ぐことが出来るからですよ」

速水の言葉は相変わらずむべもないものであった。

「その為の切り札が」

「あれね」

沙耶香が言った。

「そう、あれです」

速水もそれに頷く。そしてまず沙耶香が左手の平を自身の右肩の上で照らす。そこへ速水も自分の右手の平を照らし合わせる。まるで互いに鏡を持っていているかの様に。

「何をするつもりかしら」

「その切り札を出すのですよ」

速水がまた言った。

「貴女を封じる為のね」

「私を」

「そう、その魔法陣よ」

今度は沙耶香が言った。

「覚悟しなさい、これで終わらせるから」

「何を出すのか知らないけれど」

切り札と聞いても依子は動じてはいない。自分が作り上げた魔法陣と自身の魔力に絶対の自信を持っていたからである。

「もう止められないわよ」

「いえ、何時でも止められるわ」

沙耶香はそれに反論した。

「これならね」

「じゃあ見せてもらおうかしら」

依子は悠然と沙耶香に対して言い返した。黒い魔女と白い魔女が闇の薔薇の吹雪の中に対峙していた。七色の光の周りを五色の薔薇が待っていた。

「それをね」

「いいわ、それじゃあ」

「いきますよ」

「ええ」

沙耶香と速水は息を合わせた。今その二人の術が合わさった。

「むっ」

速水の顔の左半分を覆う髪が上に舞い上がった。そこには金色の目があった。

「その目は」

「何、貴女と同じですよ」

速水は言う。

「私も貴女や沙耶香さんと同じでしてね。力を持っているのです」

「その力の源ね、その目は」

「おわかりですか」

「ええ、その目で何を見せてくれるのかしら」

「すぐにわかりますよ」

速水はうっすらと笑って述べた。

「すぐにね。それでは」

「ええ」

速水のその黄金色の目が輝いた。そしてそこから凄まじいまでの力が放たれた。

「ムッ!？」

速水の手一枚のカードが現われる。それは運命の輪のカードであつた。

「そのカードが」

「只のカードじゃないわ」

今度は沙耶香が言う。速水の左目が黄金色になっているのに対して沙耶香のそれは紅くなっていた。闇夜の中でそれが輝く。赤と金、二つの光が闇の中にあった。

「そうでなくては切り札にはなれないわ」

「まさか」

「さあ出番よ」

「黒き運命よ」

沙耶香と速水は同時に言った。するとカードから巨大な輪が現われる。それは徐々に二人の上に舞い上がる。確かに只の運命の輪ではなかった。そこには黒い炎が纏わりついていたのであった。

「その炎は」

「私の炎よ」

沙耶香が答えた。

「私の魔力で作りに出した漆黒の炎」

「それと運命の輪が」

「さて、これが切り札よ」

沙耶香はその紅い目で依子を見据えていた。

「私達のね」

「それをどうやって使うのかしら」

「今それを見せてあげるわ」

それまで照らし合わせていた手をそれぞれ動かせる。速水から沙耶香へと流れるように。すると輪は回転しはじめた。そして唸り声をあげて急降下してきた。

第三十七章

「むっ」

依子はそれを見てすぐに攻撃を仕掛けた。その手からあの青白い炎の球を放つ。

だがそれは輪が纏っている炎によって全て打ち消された。黒い炎は依子の炎よりも遥かに強いようであった。

「無駄よ」

それを見た沙耶香が言った。

「その炎を抑えることは出来ないわ」

「そんなことは」

「貴女の炎は言うならば魔界を覆う炎」

沙耶香は否定しようとする依子にあえて言い聞かせた。

「けれど私の炎は魔界の魔物ですら焼き尽くす炎。魔界の奥底で燃え上がる炎なのよ」

その笑みが凄惨なものとなっていた。紅い瞳と白い顔がその黒い炎に禍々しく照らされていたのであった。

「それを防ぐことが。魔界の表面にしかないもので防げるかしら」

「その炎なら私も」

また炎を出してきた。今度は沙耶香のものと同じあの黒い炎であった。

「出せるわよ」

そう返して不敵に笑う。白い姿をその黒い炎が左右から照らし出し、白面を沙耶香のものと同じく黒く照らしていた。

「甘く見ているわけじゃないわよね」

「まさか」

沙耶香の言葉はあまり重いものを含んではいなかったが真剣なものであった。

「私達の目をここまで遮ってくれていたのに。そんな筈がないわ」

「じゃあわかるわね」

「だからこそなのよ」

しかし沙耶香は不敵に返した。

「ただの黒い炎じゃないのは」

「!？」

「私の輪ですよ」

速水が言った。

「私の輪が。沙耶香さんの黒い炎をさらに強めるのですよ」

「炎を」

「そうよ。回転してね」

「この輪を魔法陣の力で黒い炎と同化させました」

「そう、つまりは」

沙耶香も言う。

「この輪は回り続ける限り炎を出すのよ」

「漆黒の魔界の炎をね」

「じゃあ私の炎よりも遥かに上だというのね」

「そのつもりだけれど」

「じゃあ破ってあげるわ」

依子はその両手に漆黒の炎を宿らせる。それで以って天を焦がさんとする。

「貴女達の輪。これで」

向かって来る輪に対して黒い炎を放つ。両手を思いきり前に突き出してそこから炎を放ったのである。

「焼き尽くしてあげるわ」

「さて」

速水の左目がまた黄金色に輝いた。

「私の目が光って無事に終わったことはないですが」

「私の目もね」

沙耶香の目は紅く輝いたままであった。三つの妖星が夜の薔薇の世界に瞬く。

「これで無事に済むとは」

「思わないことです」

「くっ」

依子の炎が押されてきた。輪は徐々にはあるが進んでいく。そしてそのまま彼女に向かって来たのであった。

「ぬっつ！」

最後に依子の声が呻き声になった。輪は遂に依子を吹き飛ばし魔法陣に突き進む。そして五色の光をその黒い炎で覆い、焼き尽くしていく。陣は瞬く間に炎の中に消えていった。

「やったかしら」

「はい、間違いなく」

速水が沙耶香に答える。

「これで確実に」

「じゃあ成功ね」

彼女は速水の言葉を聞いて会心の笑みを浮かべる。今日の前では魔法陣が炎の中に包まれ燃え盛っていた。それこそが二人の勝利の証であった。

黒い炎が天まで届かんばかりに燃え上がる。二人はその側で気配を探っていた。

「まだ生きているのでしょうか？」

沙耶香が言った。

「あれだけの術を使う貴女が。そう簡単に倒れる筈がないわよね」
「わかってるみたいね」

少し離れた場所から声がした。そこに依子が姿を現わした。

彼女は輪の衝撃にも炎の熱にも耐え切っていた。だがそれでも傷は受けており所々焼けて怪我をして片膝を着いていた。だがその目はまだ死んではいなかった。

「流石と言っべきかしら」

「それは褒め言葉かしら」

「そう受け取ってくれるのならそれでいいわ」

依子は片膝をついたまま言った。

「まさか失敗するなんてね、ここで」

「私達をここに誘い込むつもりもあったのよね」

「ええ、そうよ」

その言葉にも応えた。

「結界を張ってね。魔法陣で滅ぼしてあげるつもりだったけれど」

「そうはいかなかったわね」

「今回はね」

だがそれでも依子の心まではダメージを受けてはいなかった。依然として強い光を目から放っている。その光は傲岸なものもあっても決して嫌悪感を抱かせるものではなかった。

第三十八章

「あの御前も寄せ付けないように周到にしたつもりだけれど。ぬか
ったわ」

「それでこれからどうするつもりかしら」

沙耶香は依子に問うた。

「また私達とやりあうつもりなの？それとも」

「勿論そのつもりよ」

依子の返事に迷いはない。

「けれど今は」

立ち上がる。そしてその周りに青と紫の霧を出す。

「これでお邪魔させてもらうわ」

「逃げるつもりね」

「戦略的転進よ」

笑ってそう述べる。

「ではまた」

その霧の中に身体が覆われると姿が消えた。気配も遠ざかってい
く。

「魔界の前で」

「去られましたか」

速水は依子の気配が消えたのを察して言った。黒い炎は消え去り
庭はもう元の薔薇の園になっていた。

「御自身が好きなことを思う存分されて。勝手なことです」

「女というのはそういうものよ」

沙耶香は速水の方を振り返らず声だけを彼に送った。見せはしな
いその顔は楽しそうに笑っている。

「勝手気ままなのが信条よ」

「困ったものです」

「けれど。また会いたいというラブコールはあったわね」

「それもいらないのですが」

速水はぶしつけな調子で述べた。

「私が欲しいのは」

「言いたいことはわかってるわ」

それ以上は言わせない。そして何もなかったかのように話題を完全に変えてきた。

「とりあえず今回の事件は終わったわ」

「はい」

話を変えられて不満に思ったがそれはもう口には出せなかった。

勢いを消されてしまったからだ。

「乾杯といこうかしら」

「ワインですわね」

「いえ、今日は別のものを飲みたい気分よ」

「では何でしょうか」

「ナポレオンよ」

沙耶香は言った。

「ブランデーでね。乾杯といかないかしら」

「この屋敷にありましたっけ」

「あるわよ、これだけの屋敷なら」

この言葉は勘と嗅覚によるものだった。沙耶香はこの屋敷にもナポレオンがあるということをもう嗅ぎ付けていたのである。酒を愛する女の勘と嗅覚であった。

「それをね。頂きましょう」

「わかりました。では」

速水はそれを聞いてすつと笑って述べた。

「お付き合いさせて頂きます」

「有り難いわ。一人より二人の方がね。こうした時は美味しいのよ」

「ですね」

「そして彼女だけれど」

「何か？」

速水の声の色がここで微妙に変わった。沙耶香の声は普通の調子であったが。

「また。出て来るでしょうね」

「それはね」

それはもう規定事項のようなものであった。二人にとっては。

「これで諦めるタイプではないでしょうね」

「そうね。また戦うことになるわ」

沙耶香は述べた。

「今度こそといきたいところだけれど」

「それは向こうも同じですよ」

速水はまたあのうつつすらとした笑いと共にこう言った。不思議と影のない言葉であった。

「今度こそ私達を退けてこの世に魔界を創り出そうとするでしょうね」

「そこは血縁ということかしら」

「でしょうね、やはり」

「まあ彼女が出て来たらまた戦ってあげればいいわ」

沙耶香は特に気にしないと云った調子で述べた。

「じつくりとね」

「では今は」

「ええ、ナポレオンよ」

「チーズと一緒に」

「悪くないわね」

「もっと他にも欲しいのですが」

「それはないわね」

沙耶香は速水の誘いをまたしてもかわした。そしてそのまま屋敷に戻るのであった。こうしてこの屋敷での薔薇の戦いは終わった。五人の犠牲を払いながらも何とか終えた戦いであった。それは速水のタロットの占いに添ったものであった。

第三十九章

「そうか、あの医者がそうだったのか」
老人は次の日ようやく屋敷に帰って来れた。そして野島と共に二人の話を聞いていた。

「まさか女だったとはな」

「しかも彼女の孫娘だったとは」

野島も口を開いて述べる。二人にとってもこれは思わぬことであつたのだ。

「私もまさかとは思いましたがね」

それに速水が答える。四人は今家の門にいた。見送りであつたのだ。

「ですが間違いないです」

「あれだけの魔力の持ち主ともなると」

「だろうな」

「御前の介入さえ阻みましたから」

「わしも老いたかな」

老人は寂しげな苦笑いを浮かべて一言述べた。

「かつてはその彼女の祖母とも何度か渡り合ったのだが」

「いえ、彼女は」

速水が言う。

「彼女の祖母よりも遙かに強力です」

「魔人そのものですね」

「魔人か」

老人はそれを聞いて少し遠い目になった。

「かつてはわしもその祖母もそう呼ばれておつたか」

「若き日ですか」

「そうじゃ。懐かしいな」

「御前、その懐かしき日々は」

「うむ、今思っても仕方ないな」

老人は野島に言葉を返した。

「今ここで言ってもな」

「それで事件は解決したのですね」

「ええ、とりあえずは」

今度は沙耶香が答えた。

「何とかですが」

「左様ですか」

「しかし彼女は」

「いえ、それはまずはいいです」

野島はその整った目に口惜しさを含ませた沙耶香に対して言った。

「魔界を退けただけでも」

「そう言っただけ感謝します」

「御礼はそれぞれの口座に振り込んでおきますので」

「ええ」

「ではまた」

「はい」

「それは」

沙耶香と速水がそれぞれ挨拶をした。二人は完全には納得はしていなかったがそれでも挨拶は交えたのであった。

「そして二人共これからどうするつもりなのじゃ」

「これからですか」

沙耶香は老人の言葉を耳にするとすつとあの妖しい笑みを浮かべた。

「まずは魔都で。宴を楽しみます」

「ふむ、いつもの様にじゃな」

「はい。そしてまた話が来れば」

「動くのか」

「私は本業をしてきます」

「御主もいつも通りじゃな」

「ですね」

「ではまたそれぞれの場所に戻って」

「御前もまた」

「何、わしのは気にすることはない」

彼は沙耶香の言葉にからからと笑った。

「わしはもう古い先短い。ここで楽しくやっていく」

「左様ですか」

「孫達の成長を眺めながらな」

「しかし御前」

速水はにこりと笑って彼に声をかけてきた。

「何じゃ？」

「私の占いでは御前はまだまだ長生きされますよ」

「ほう」

「そして。そうそう平穩には日々を送れそうにもありません」

「また嫌なことを言うのう」

「私が言ったではありません。カードがそう示したのですよ」

「そのカードを引くのは御主じゃろう？」

悪戯っぽく速水を見上げて言った。目も顔も笑っている。

「全く。時として酷な占いじゃな」

「私の占いは外れませんので」

「ただしわかりにくい時があるけれどね」

沙耶香はこう言って今回の事件の速水の占いを皮肉った。

「それが困ったことかしら」

「まあ、そちらも修行じゃ」

老人は笑みをたたえ続けたまま言う。

「何がどうなのか解していくのみな」

「そうですね。そちらも」

「では私は」

「御主は色の道か。それとも魔の道か」

「両方ですよ」

沙耶香の答えはこうであった。

「その二つがないと。人生とは実に味気ないもの」

「そうか」

「その二つがある場所こそ私の居場所なのですから」

「ではその二つが揃った時にまたな」

「ええ、その時まで」

身の周りに何かを出してきた。それはあの五色の薔薇の花弁であった。それで自身の身を包む。

「御機嫌よう」

「またな」

「そして私も」

速水はカードを取り出した。それは星であった。その瞬きの間に身を隠す。

「また御会いする時まで」

「少しは彼女を振り向かせるのだぞ」

「努力します」

「私も」

沙耶香はそれに応えて最後に笑った。笑みを残して薔薇の中に消えていった。速水もまた瞬きの中に。

「行ったな」

「はい」

最後に残った老人の言葉に野島が応えた。

「次に会うのを楽しみにしておくか」

「そうですね」

二人は口の端だけで笑っていた。その前には。薔薇の香りと星の残り光が微かに残っていた。だがそれも風の中に消えてしまった。

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9038a/>

黒魔術師松本沙耶香 薔薇篇

2009年6月15日21時59分発行